◉故事成語がズバリわかる！【荀子編④】

もりもり智慧(ちえ)の書⑥





真理の御魂(みたま)最聖麻原彰晃尊師

●故事成語がズバリわかる！【荀子編④】

もりもり智慧(ちえ)のわく書⑥

真理の御魂(みたま) 最聖 麻原彰晃尊師

はじめに

わたしが修行の道に入り、かれこれ十八年になる。この十八年間の土台となったものは何かというと、中国の医学、つまり漢方医学である。この中国医学は、もともと素問(そもん)・霊枢(れいすう)・陰陽五行論といった中国の古典的な思想を背景としている。そして、これらはすべて循環説である。循環説とは「輪廻と同じように現象が循環するんだ」ということから発展している。

そしてこれは、修行者が修行に至り、ある段階に到達すると経験するプロセスであることは間違いない。そして、ここから抜け出し、本当の自由・幸福・歓喜であるニルヴァーナへと至るのである。

ところで、荀子(じゅんし)の思想は、この土台をもとに、人間とは何か、そして、どのように生きるならば他がどのように評価し、そして社会はどのようになるといった考え方に帰納している。

わたしは、荀子のこのような考え方は、先ほど述べたヒナヤーナの考え方を一歩進めたマハーヤーナ的考え方であると常々考えている。そして、この荀子のマハーヤーナ的考え方が政治の根本的理論につながるならば、そのとき、この世界は、地球は、素晴らしい世の中になることは間違いないだろう。

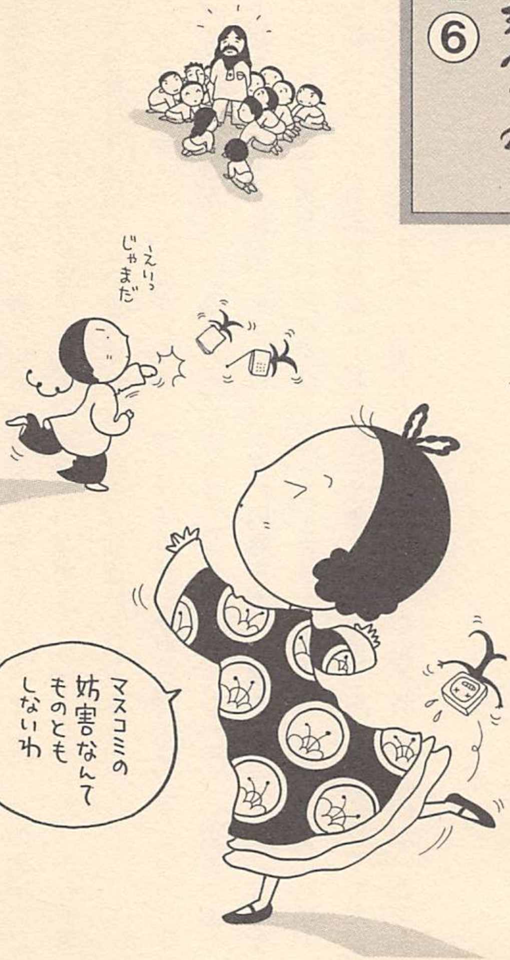
ただ、いかんせん、荀子がマハーヤーナよりより優れた教えであるテーラヴァーダの全体系を理解していなかったこともまた見逃すべきでない一つの項目であると思われる。もし彼が、テーラヴァーダの内容をすべて理解することができたならば、社会が素晴らしいだけでなく、そこに生存する魂が、その場、つまり地球から死に、そして最高の世界へと転生する素晴らしい王国が形成されるはずである。

そしてわたしは、すべての魂のために、その教えを説き明かし続けたいと考えている。

麻原彰晃

もりもり智慧のわく書⑥

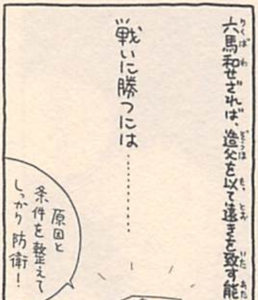
多くの者を導くカルマのある者には……



良医の門、病人多し

【荀子編④】


遊べば必ず士に就く
偉大なる生命体に変化するために!!
ここが別れ道だわ


六馬和せざれば、造父も以て遠きを致す能わず
戦いに勝つには……
原因と条件を整えてしっかり防衛!


楚王細腰を好んで、朝に餓人有り
すべては苦しみの源……
わたしやせてきれい?
グラマーがお好き?
無常を理解しいつも健やかに……

言は禍いを招く有り



自分の言葉を大切に……
いつまでやるの？
……
はなしかけないでください
沈黙の行中



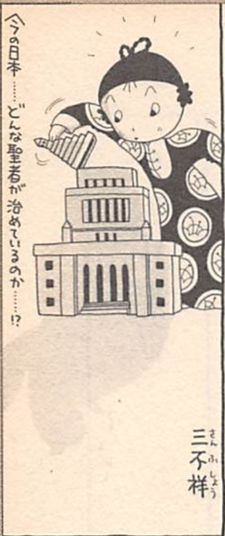
小人の勇
本当の勇気とは、堪え忍び目的を淡々と達成すること……
開通だ!!



氷は水之を為して、水よりも寒し
あなたは生まれたときのカルマを超えられるか……!!
経験の構成が人生を決めるわ







●編集スタッフ
聖者ヤソーダラー最上善逝
聖者マハーナーマ化身成就師
聖者ヴァンギーサ上流師
聖者タントラバッダー到達光正師
瓦吹英宣
菊池弥生

●イラストレーション
片桐りえ

●カバー・デザイン
スワミ・タントラスバー

●題字
スワミ・ヴァラカツ

❖公正無私

［荀子、賦］　幽晦登昭、日月下蔵、公正無私、反見従横。

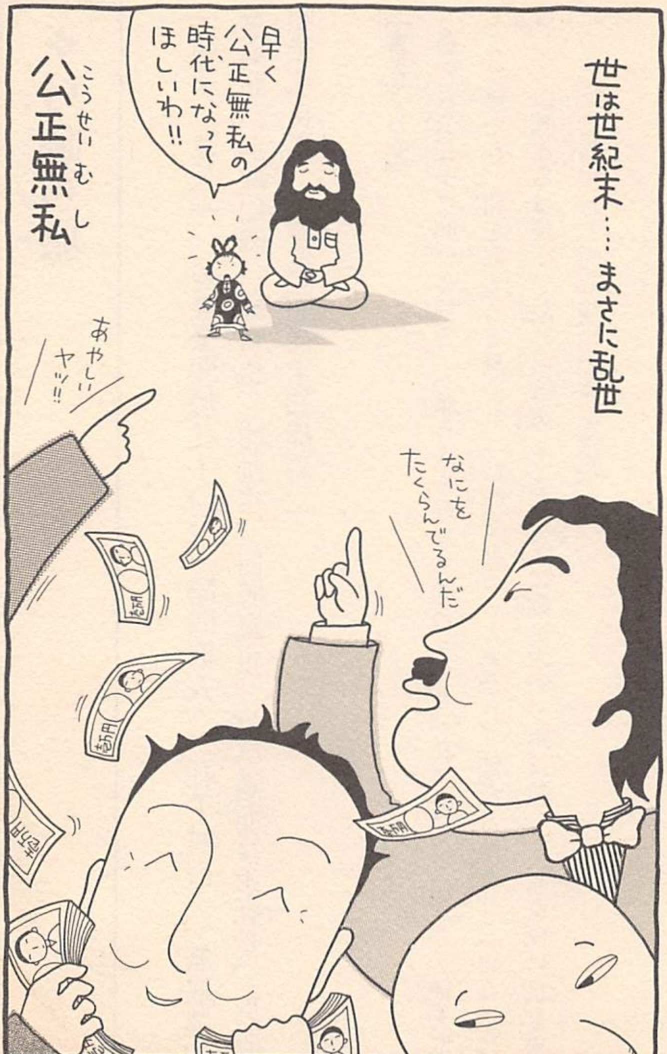
【書き下し文】
幽晦は登り昭われ、日月は下り蔵れ、公正無私なるに、反って従横とせらる。

【訳】
暗愚な小人物は高位に就いて栄え、明智の君子は下位にいて隠れ、公正で私心を持たないのに、反対に陰謀と裏切りに満ちた策謀家といわれる。

【類句】
・公平無私(こうへいむし)



今日の故事成語は、「公正無私」。
この言葉は、大変重要な言葉です。つまり、公に正しく私心のない心の状態を表わします。この公に正しく、私心のない状態をわたしたちが真に形成するためには、完全なる煩悩の破壊をする以外に方法はありません。
ところで荀子は、この公正無私の人たちが、乱れた世の中においては私心があるように中傷される、あるいは公正無私の人が権謀術数を用いているように非難・中傷されると言っています。これが乱世です。
日本では、乱世というと戦国時代を思い出しますが、まさに世紀末の今が、わたしには乱世のように思われます。そして、公正無私の人がしいたげられ、心の卑しい者が権力の座に就き、そして私利私欲を貪っている。——果たしてこの時代が何年続くのでしょうか。
早く、公正無私の時代になってほしいものです。


世は世紀末……まさに乱世
早く公正無私の時代になってほしいわ!!
公正無私（こうせいむし）
なにをたくらんでるんだ
あやしいヤツ!!

❖弓調馬服

［荀子、哀公］　魯哀公問於孔子曰、「請問取人。」孔子対曰、「無取健、無取詌、無取口啍。健貪也、詌乱也、口啍誕也。故弓調而後求勁焉、馬服而後求良焉、士信愨而後求知能焉。」

【書き下し文】

魯の哀公孔子に問いて曰く、「請う人を取るを問わん」と。孔子対えて曰く、「健を取ること無かれ、詌を取ること無かれ、口啍を取ること無かれ。健なるは貪り、詌なるは乱し、口啍なるは誕す。故に弓は調して而る後に勁を求め、馬は服して而る後に良を求め、士は信愨にして而る後に知能を求む。」

【訳】

魯の哀公が孔子に尋ねていうには、

「人を採用する方法をどうかお教えください」と。

孔子がお答えしていうには、

「ただ強いばかりの者を採用してはいけません。人を脅迫する者を採用してはいけません。多弁で実のない者を採用してはいけません。ただ強いばかりの者はむさぼり、人を脅迫する者は混乱させ、多弁で実のない者は大言を吐きます。

つまり、弓はよく調整されていることが第一で、その上で強い弓を求め、馬はよく服従することが第一で、その上で良馬を求めますが、人士は誠実なことが第一で、その上で知能ある者を求めるのです。」

【注】

・魯の哀公——春秋時代、魯の君主。

・孔子——春秋時代、魯の人。儒家の祖。名は丘、字は仲尼。

今日の故事成語は、「弓調馬服（きゅうちょうばふく）」です。

この「弓調馬服」は、わたしたちに大きな示唆を与えてくれます。つまり、大事を達成するとき、その土台が大切である。逆の言い方をするならば、土台の固まらないことには、大事を達成できないという意味がこの中には含まれています。

そして、人を雇用する際も、あるいは物を調達する際も、この「弓調馬服」のことわざどおりに、その者がしっかりしている、あるいはその事物がしっかりしていることをまず第一とし、そして、目的に合わせて雇用するべきであると説く孔子（こうし）の言葉からこの言葉は派生したものです。

ところで、テーラヴァーダの実践は、長きにわたる修行を要します。例えばサキャ神賢のような偉大な魂が、五つの神通力、――つまり、浮揚・天耳通・他心通・宿命通、そして未来を知る力等の五つの神通力を得てから真理勝者になるまで、なんと「限りなき長い四つの十万のカルパ」を経験しているのです。これはまさに「弓調」の典型的な例ではないかと思います。

そして、わたしもその道を歩いていますが、ひたすら土台を固めること、そしてこの

土台が本当に確定したとき、えもいわれぬ不動心が身につき、そして心の安らぎを得ることができるのです。
皆さんも、目先のことにとらわれず、本質を磨き上げる修行をしてみてはいかがでしょうか。



❖六馬和せざれば、造父も以て遠きを致す能わず

［荀子、議兵］ 臨武君与孫卿子、議兵於趙孝成王前。王曰、「請問兵要。」臨武君対曰、「上得天時、下得地利、観敵之変動、後之発、先之至。此用兵之要術也。」孫卿子曰、「不然。臣所聞古之道、凡用兵攻戦之本、在乎壱民。弓矢不調、則羿不能以中微。六馬不和、則造父不能以致遠。士民不親附、則湯武不能以必勝也。故善附民者、是乃善用兵者也。故兵要在乎善附民而已。」

【書き下し文】

臨武君と孫卿子と、兵を趙の孝成王の前に議す。王曰く、「請う兵の要を問わん」と。

臨武君対えて曰く、「上は天の時を得、下は地の利を得、敵の変動を観、之に後れて発し、

之に先んじて至る。此れ用兵の要術なり」と。孫卿子曰く、「然らず。臣聞く所の古の道は、凡そ用兵攻戦の本は、民を壱にするに在り。弓矢調わざれば、則ち羿も以て微に中つる能わず。六馬和せざれば、則ち造父も以て遠きを致す能わず。士民親附せざれば、則ち湯・武も以て必勝する能わざるなり。故に善く民を附する者は、是れ乃ち善く兵を用うる者なり。故に兵の要は善く民を附するに在るのみ」と。

【訳】

臨武君と孫卿子とは、趙の孝成王の前で兵法について論議した。王が言うには、

「兵法の根本をどうかお教えください」と。

臨武君がお答えしていうには、

「上は天候や時節という機会を得、下は地勢や風土の利益を得、敵の変化や動向を観察し、敵より遅れて出発しながら敵より先に到着するようにします。これが用兵の根本の方法であります」と。

孫卿子がいうには、

「そうではありません。わたしが聞いている昔のやり方では、およそ用兵攻戦の基本は人民を統一することにあります。弓と矢がうまく調整されていなければ、名手である羿でも微小なものに当てることはできません。六頭の馬がうまく調和していなければ、名御者である造父でも遠くまで行き着くことはできません。同様に、士民が親しみなついていなければ、聖天子である湯王や武王でも必ず勝つことはできないのです。

つまり、うまく人民をなつき従える者、これこそがうまく兵を用いるのであります。したがって、兵法の根本は、うまく人民をなつき従えることだけにあるのです」と。

【注】

・臨武君——戦国時代、楚の将軍。
・孫卿子——荀子のこと。
・孝成王——戦国時代、趙の君主。恵文王の子。
・羿——伝説上の弓の名人。堯の世に太陽が十個出て人民が苦しんだとき、その中の九個を射落としたという。

・造父――周の穆王の御者。天下一の名御者といわれる。
・湯王――殷の初代の王。成湯ともいう。夏の暴君桀王を討ち殷王朝を開いた。
・武王――周の初代の天子。文王の子で周公の兄。殷の暴君紂王を討ち周王朝を開いた。

＊

今日の故事成語は、「六馬和せざれば、造父も以て遠きを致す能わず」です。ちょっと長いですね。

この意味は、造父という名調御者であったとしても、天子の乗る六頭だての馬車を調御する際、もしその六頭が足並みをそろえなければ調御することはできない、そして遠くへ行くことはできないという意味です。

これは、例えば戦いに向かったとき、その国民が一つの方向に向かってこそ初めて勝つことができると説く荀子の考え方ですが、わたしは、現代の戦いにおいて、これについては少し異論があります。それは、例えば第二次世界大戦、日本国民は一丸となって連合国と戦いました。しかし結果は敗戦。それはなぜだったのかというと、あまりにも兵器の差があったからです。そして、今の自衛隊の軍備を見る限りにおいては、例えば

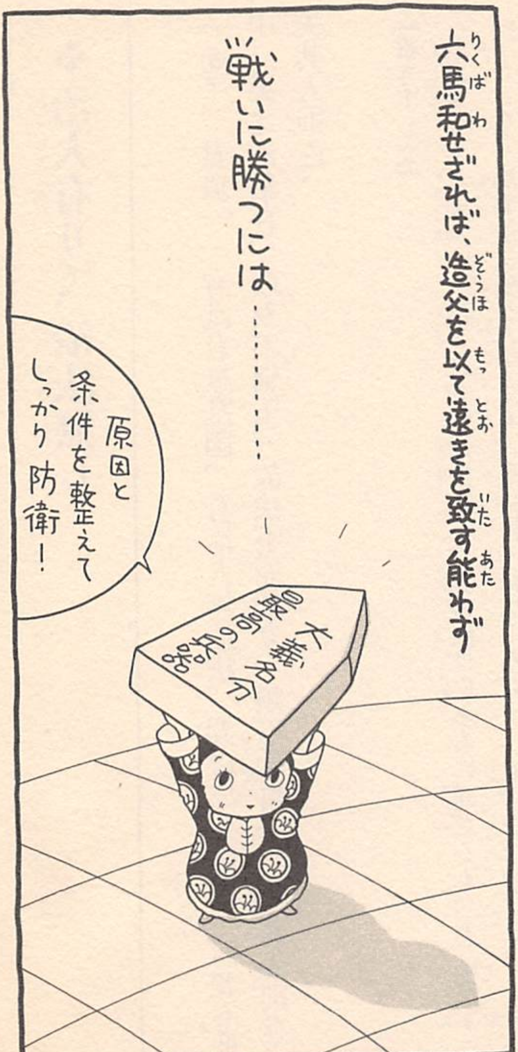
アメリカや、あるいはヨーロッパの国々の兵器の力と比較した場合、まさに〝おもちゃの軍隊〟というのがわたしの印象です。もし今、この戦力で第二次世界大戦当時のアメリカにぶつかったとしても、おそらく簡単に破れるでしょう。

これからもわかるとおり、ただ単に国民の意思が統一されていれば戦争に勝てるというのは、観念論の誤った見解ではないでしょうか。もちろん、いくら素晴らしい兵器がそろっていたとしても、国民が一丸となって戦わなければ、同じように勝つことはできません。

では、何をもってすれば勝てるのかと。それは、原因と条件をしっかりと検討した上で、その原因と条件を整えれば戦いに勝つことはできます。では原因とは何か。当然それは、精神的には大義名分が成立すること。つまり心にわだかまりがないことが第一であり、そして、勝つための条件としては、最高の兵器を有することといえるでしょう。この最高の兵器を有し、しかも大義名分が成立するならば、国民は一丸となり、そして最高の兵器によって相手を打ち負かすことができるのです。

ところで、もしわたしが日本の防衛を担当する人間であるとするならば、わたしは今

の自衛隊は持たないでしょう。なぜならば、今の弱小の兵力が存在することによって、逆に国民に対する大いなる被害を与えるからです。持つならば最高の兵器を持って、しっかりと国を防御してもらいたいものです。



❖治人有りて、治法無し

〔荀子、君道〕　有乱君無乱国、有治人無治法。羿之法非亡也、而羿不世中。禹之法猶存、而夏不世王。故法不能独立、類不能自行。得其人則存、失其人則亡。

【書き下し文】
乱君有りて乱国無く、治人有りて治法無し。羿の法は亡ぶるに非ざるも、羿は世〻には中たらず。禹の法は猶お存するも、夏は世〻には王たらず。故に法は独り立つこと能わず、類は自ら行わるること能わず。其の人を得れば則ち存し、其の人を失えば則ち亡ぶ。

【訳】

国家を乱す君主はいるが、必ず乱れるという国家はない。国家をよく治める人物はいるが、必ずよく治まるという法律はない。羿(げい)の射術の法は滅んでいないが、羿の後継者が代々うまく的に当てるというわけではない。禹王(うおう)の治世の法は今なお存在するが、夏(か)王朝の子孫が代々王になるわけではない。

つまり、法律はそれだけで存続することはできず、条例はそれ自身で施行されることはできず、しかるべき人物が得られれば存続し、しかるべき人物がいなくなれば滅んでしまう。

【注】

・羿――18ページ参照

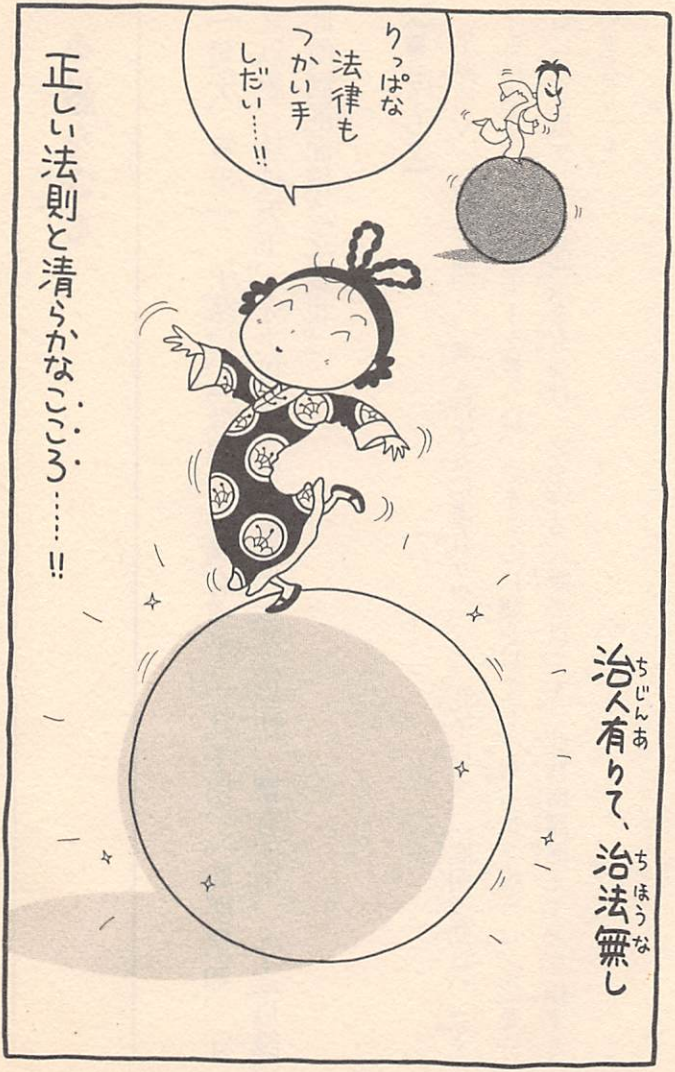
・禹王――中国古代の聖天子。舜(しゅん)の後に帝位に就き、夏王朝を開く。

今日の故事成語は、「治人有りて、治法無し」です。

これは、いかに立派な法律があったとしても、それをしっかりと運用する人がいなければ、その法律は〝死に法〟となるという考え方です。確かに、これは荀子の鋭いものの考え方の一面を表わしています。

この考え方にはわたしも同感です。なぜならば、その法律を運用するのは人であり、そして、もしいくら立派な法律があったとしても、その法律を運用する人に心のけがれがあった場合、当然それは、その法律そのものが正しくない方向に活用されることは間違いないからです。

したがって、この日本を良くするためには、一人一人が自覚をし、そして正しい法則を実践し、心が清らかで、しかも公正で私心のないことが大切なのです。早くそのような日本になってほしいものです。



治人有りて、治法無し
りっぱな法律もつかい手しだい……!!
正しい法則と清らかなこころ……!!

❖愚を守る

［荀子、宥坐］子路曰、「敢問、持満有道乎。」孔子曰、「聡明聖知、守之以愚、功被天下、守之以譲、勇力撫世、守之以怯、富有四海、守之以謙。此所謂挹而損之之道也。」

【書き下し文】
子路曰く、「敢えて問う、満を持するに道有りや」と。孔子曰く、「聡明聖知は、之を守るに愚を以てし、功天下を被うは、之を守るに譲を以てし、勇力世を撫うは、之を守るに怯を以てし、富四海を有つは、之を守るに謙を以てす。此れ所謂挹えて之を損ずるの道なり」と。

【訳】

子路がいうには、

「あえてお尋ねしますが、満ち満ちた状態を維持する方法があるのでしょうか」と。

孔子がいうには、

「聡明で優れた智慧があるならば、愚かに振る舞ってそれを守り、天下に行きわたるほどの功績があるならば、人に譲ることによってそれを守り、世の中を覆うほどの勇敢さがあるならば、臆病に振る舞ってそれを守り、四つの海を占有するほどの財産があるならば、謙虚さによってそれを守る。これが世にいう、抑損（心を抑えてへりくだること）の方法である」と。

【注】

・子路――春秋時代、魯の人。孔子の弟子。仲由の字。勇に優れ、信義を重んじた。

今日の故事成語は、「愚を守る」です。
「愚を守る」とは、他人に対して自分自身の才能、あるいはいろいろな力をひけらかさず、絶えず愚人のように振る舞う、愚かな人のように振る舞うという意味です。
これは、確かに処世術の一つの奥義であると思われます。しかし、この奥義を使わなければならないということは、まだこの魂はカルマの法則というものを理解していないように思われます。それはなぜでしょうか。
もし、自分自身の周りの人のそれぞれのカルマの特性を理解し、そして、完全に見抜くことができるならば、必要に応じて自分の要素を見せればいいわけです。つまり、自分の要素を正しく見せたとして、相手が正しく反応する場合、それを正当に見せればいいし、逆に、自分の要素を正しく見せることによって相手が過剰な反応を示す場合、その場合には自分の要素を見せなければいいということになります。
このようなことは、明らかに他心通を含めた神通力を有すればこそなせる技です。したがって、わたしたちが、もし神通力の一つでも二つでも得ることができるならば、わたしたちは「愚を守る」必要はないのです。

さあ、あなたは、おどおどしながら自分の持っている才能を最大限に活用することなく愚を守って人生を送りますか。それとも自分の持っている能力を最大限に活用し、大いなる徳を積み、そして堂々と生きますか。その選択がどちらに転ぶかは、あなたがしっかりと修行し、そして、神通力を得るかどうかですね。



❖ 跛鼈も千里

「荀子、脩身」　蹞歩而不休、跛鼈千里、累土而不輟、丘山崇成。厭其源、開其瀆、江河可竭、一進一退、一左一右、六驥不致。彼人之才性之相県也、豈若跛鼈之与六驥足哉。然而跛鼈致之、六驥不致、是無他故焉。或為之、或不為爾。

【書き下し文】

蹞歩して休まざれば、跛鼈も千里、累土して輟まざれば、丘山も崇成す。其の源を厭ぎ、其の瀆を開かば、江河も竭すべく、一進一退し、一左一右すれば、六驥も致さず。彼の人の才性の相県たるや、豈に跛鼈と六驥の足との若くならんや。然り而して跛鼈は之を致し、六驥は致さざるは、是れ他の故無し。或いは之を為し、或いは為さざるのみ。

【訳】

一歩一歩いて休まなければ、びっこのスッポンでも千里を行くし、土を積み重ねてやめなければ、丘や山も高くなる。水源をふさいで河口を開くなら、長江や黄河の水でさえ涸(か)らすことができるが、進んだり退いたり左に行ったり右に行ったりしていては、六頭立ての駿馬(しゅんめ)でも行き着くことはできない。

いったい人間の生まれつきの素質の隔たりが、どうしてびっこのスッポンと六頭立ての駿馬の足ほど甚だしいことがあろうか。しかしながら、びっこのスッポンが行き着き、六頭立ての駿馬が行き着かないのは、それこそ他の理由があるわけではない。一方は努力し、一方は努力しなかったからである。

【類句】

・蹞歩(きほ)して休(やす)まざれば、跛鼈(はべつ)も千里(せんり)



今日の故事成語は、「跛鼈も千里」です。

この「跛鼈も千里」とは、わたしたちがよく知っている「ウサギとカメ」の話とまさに同じです。つまり、びっこのスッポンも休まずコツコツと歩くことにより、千里の道のりを歩くことができる。もともと才能がなくとも、努力し続ければ偉大な結果を得るんだと説く荀子の考え方です。

この考え方はわたしも賛成です。わたし自体、自分自身のことを「跛鼈」だと考えています。そして、日々自分のできる努力の限界を尽くすことにより、千里歩けたらいいなというのがわたしの今の気持ちです。

あなたは賢い駿馬かもしれない、あるいはあなたはウサギかもしれない。もし駿馬であり、あるいはウサギであった場合、努力をし続けるならば、千里といわず万里、あるいは億里といった長き距離を歩くことができるでしょう。そしてそれは、あなたのこれからの流転に、大きな、素晴らしい影響を与えることでしょう。しっかり頑張ってください。


跛鼈(はべつ)も千里(せんり)
千里といわず
万里といわず
億里
あなたがたとえ
カメでもウサギでも
休まず
コツコツ努力をすれば……

❖ 禍いは纖纖より生ず

［荀子、大略］　流言滅之、貨色遠之。禍之所由生也、生自纖纖也。是故君子蚤絶之。

【書き下し文】
流言は之を滅ぼし、貨色は之を遠ざく。禍いの由りて生ずる所や、纖纖より生ずるなり。是の故に君子は蚤く之を絶つ。

【訳】
流言を消滅し、財貨や女色を遠ざける。災いが起こる原因は、微細なことによるのである。だから、君子は早いうちに断ち切ってしまうのである。

【類句】

・禍いは細微より起こる



今日の故事成語は、「禍いは繊繊より生ず」です。「繊繊」とは、「微細なこと」という意味です。

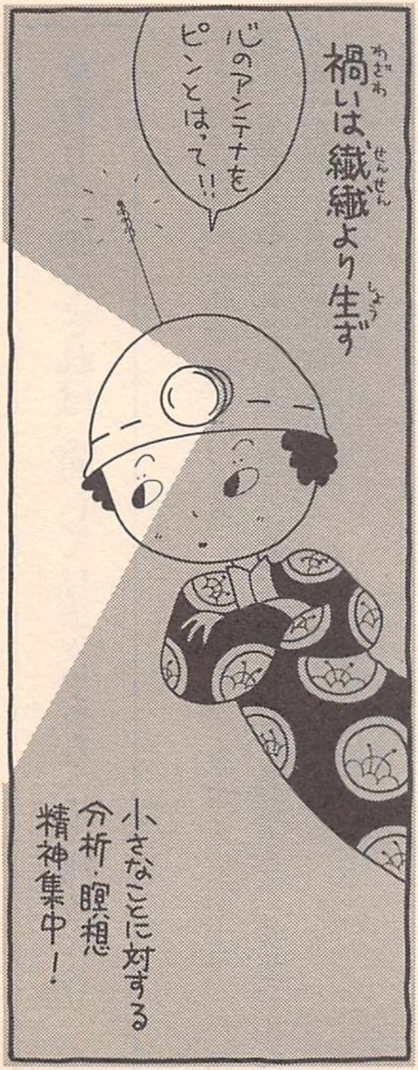
確かに、わたしたちが日々精神集中をしていなければ、そこから大きな災いが生じることは間違いありません。例えば、簡単な例を挙げるならば、肉体が疲労しているとき、汗をかいて、大したことはないと考えそのままにしておく。そこで体が冷え、そして大きな病にかかる。あるいは、例えば会社を運営している場合、その会社の従業員が会社にとって不利益なことをいくつかなすと。そして、それはまだ会社にとって大したダメージがないと見ると。しかし、その社員がしまいにはその会社をつぶしてしまうことがあると。これは実際に、わたしの周りであった話です。

もし、第一の例において、自分自身が疲労していることを理解し、そして汗をかいたらしっかりとふき、新しい衣に変える等の注意をしていたとするならば、あるいは、会社に不利益を与える従業員に対して、しっかりと監視し、そして、その従業員に対し正しい対応をしていたとするならば、当然災いは生じなかったはずです。

しかし、わたしたちは小さなことに対する分析、訓練というものを日ごろ行なってい

ません。どうしても目の前の大きなことに心は動かされがちなのです。そしてそれにより大事を失敗します。したがって、日々瞑想の訓練を行ない、そして小さなことに対して精神集中し、問題点を絶えず解決する訓練をするならば、このようなことは起きないでしょう。

さあ今日から、あなたも「繊繊」に対して十分に注意しましょう。



❖有りて施さざれば、窮して与えらるること無きなり

［荀子、法行］　孔子曰、「君子有三思。而不可不思也。少而不学、長無能也。老而不教、死無思也。有而不施、窮無与也。是故君子、少思長則学、老思死則教、有思窮則施也。」

【書き下し文】

孔子曰く、「君子に三思有り。而して思わざるべからざるなり。少くして学ばざれば、長じて能無きなり。老いて教えざれば、死して思わるること無きなり。有りて施さざれば、窮して与えらるること無きなり。是の故に君子は、少くして長を思えば則ち学び、老いて死を思えば則ち教え、有りて窮を思えば則ち施すなり」と。

有りて施さざれば、窮して与えらるること無きなり

【訳】

孔子がいうには、

「君子に三つの思慮すべきことがある。これはだれでも考えなければならないことである。若いときに学問をしなければ、成長してから無能者になる。年老いたときに人を教え導くことがなければ、死んでから慕われることがない。物を持っているときに施すことがなければ、困窮したときに助けてもらえない。

だから、君子は若いときに成長後のことを思って学問をし、年老いたときに死後のことを思って人を教え導き、物を持っているときに困窮したときのことを思って施すのである」と。

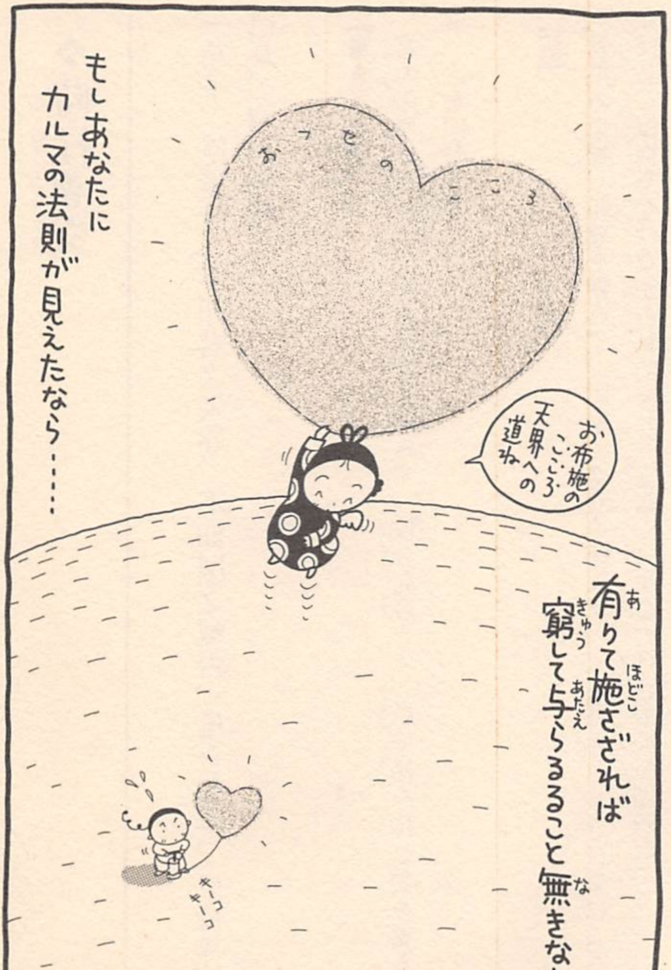


今日の故事成語は、「有りて施さざれば、窮して与えらるること無きなり」です。

この故事成語の意味合いは、まさに仏教的な観があります。これはもともと、孔子の考えから出た言葉ですが、さすがに天と人の道を説く孔子ならではのものの考え方だといわざるを得ないでしょう。つまり、あるときに物を施さなければ、窮したときにだれも物を施してくれないという考え方です。

そしてこれは、基本的な布施の実践につながり、そして最終的には限界の布施、つまり身をも供養する、仏教的真理の最高の布施に移行する教えへとつながるのです。つまり、天界へ至るためには、布施の実践は不可欠。そして、それを孔子もよく理解していたようです。その教えを広めた荀子、やはりさすがに孔子の弟子といわざるを得ません。

今、あなたはカルマの法則が見えない。したがって、布施に価値を見いだせないかもしれない。しかし、もしあなたがカルマの法則が見えるようになるならば、この布施をすることの意義がよく理解できるようになるはずです。早くそうなってほしいものです。


お布施のこころ天界への道ね
おふせのこころ
有りて施さざれば
窮して与えらるること無きなり
もしあなたにカルマの法則が見えたなら……
キーコキーコ

❖時禄養交

［荀子、臣道］　不卹君之栄辱、不卹国之臧否、偸合苟容、以持禄養交而已耳、謂之国賊。

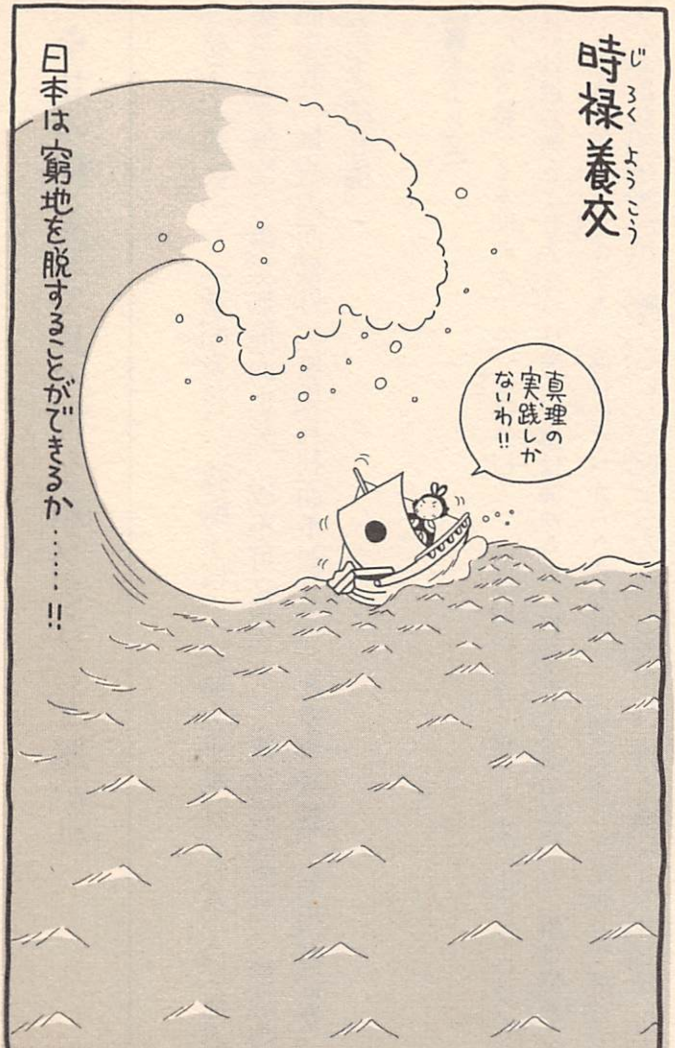
【書き下し文】
君の栄辱を卹みず、国の臧否を卹みず、偸合苟容して、以て禄を持し交を養うのみなる、之を国賊と謂う。

【訳】
君主の栄誉や恥辱を顧みず、国家の盛衰を顧みず、人に迎合して人に気に入られるようにし、俸禄を受けながら私的交わりを盛んにするだけのものを国賊という。

時禄養交



今日の故事成語は、「時禄養交（じろくようこう）」です。
この「持禄養交」とは、荀子（じゅんし）の、官職に就く者に対する痛烈な非難の言葉です。つまり、俸禄を受けながら自分自身の保身に回り、そして、私的交わりに重きをなす重臣に対する痛烈な非難、それがこの「持禄養交」です。
ところで、今の日本の官僚、あるいは日本の議員等を見た場合、この「持禄養交」に当たらない人が果たしてどれだけいるのでしょうか。そして今、日本は大いなる不況へと没入しています。これから先、いったいどのような世の中が展開されるのか……。非常に第二次世界大戦の様相と似てきています。
このようなときに「持禄養交」の民だけが存在するとするならば、この日本は、衰亡の一途をたどることとなるでしょう。ここで、もし国の一人一人が真理の実践を行ない、それによって真理に対し開眼するならば、この日本は窮地を脱し、素晴らしい国になることは間違いありません。
さあ皆さん、真理の実践を一緒にしようではありませんか。


時禄養交（じろくようこう）
真理の実践しかないわ!!
日本は窮地を脱することができるか……!!

❖其の利を見て其の害を顧みざること無かれ

［荀子、議兵］　「請問為将。」孫卿子曰、「知莫大乎棄疑、行莫大乎無過、事莫大乎無悔。事至無悔而止矣、成不可必也。……無欲将而悪廃。無急勝而忘敗。無威内而軽外。無見其利而不顧其害。凡慮事欲孰、而用財欲泰。夫是之謂五権。」

【書き下し文】

「請う将たるを問わん」と。孫卿子曰く、「知は疑わしきを棄つるより大なるは莫く、行いは過ち無きより大なるは莫く、事は悔ゆること無きより大なるは莫し。事は悔ゆること無きに至りて止まるも、成は必すべからざるなり。……将たることを欲して廃せらるることを悪む無かれ。勝に急にして敗を忘るること無かれ。内を威にして外を軽んず

ること無かれ。其の利を見て其の害を顧みざること無かれ。凡そ事を慮るには孰せんことを欲して、財を用いるには泰ならんことを欲す。夫れ是を之れ五権と謂う。」

【訳】

「将軍はどうあるべきかをどうかお教えください。」

と、（孝成王と臨武君は）尋ねた。孫卿子がいうには、

「知識は疑わしい点をなくすことより大きなものはなく、行為は過ちがないことより大きなものはなく、物事は後悔がないことより大きなものはありません。物事は後悔がないことに至るのを究極の目標としますが、成功するかどうかは必ずしも保証できないのです。

……将軍であり続けたいと願って、やめさせられることを嫌がってはなりません。ただ戦いに勝つことだけを急いで、敗れることがあるのを忘れてはなりません。内部の者に威張り散らし、外部の者を軽んじてはなりません。利益ばかりを見て、損害を顧みないことがあってはなりません。何か事を謀るときには熟考することが望ましく、財物を

用いるときにはゆとりのある態度が望ましいのです。そもそも、こういうことを五権というのです。」

【注】

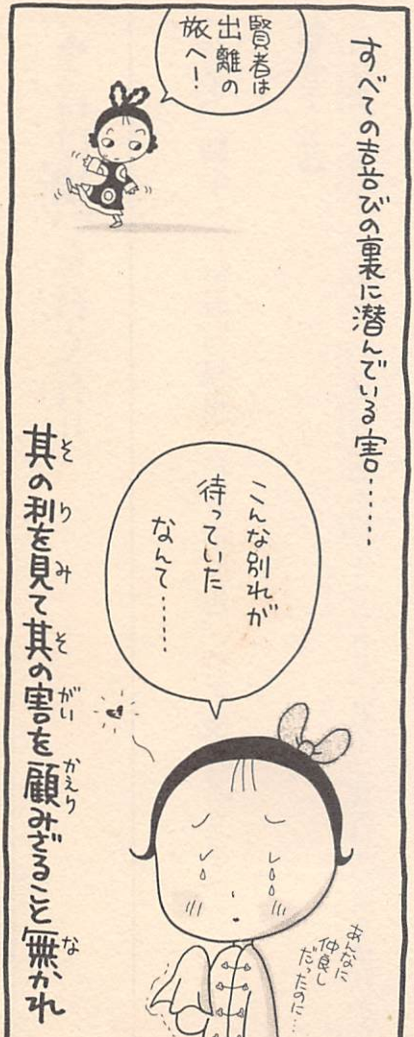
・孝成王、臨武君、孫卿子——18ページ参照。

＊

今日の故事成語は、「其の利を見て其の害を顧みざること無かれ」です。
これは荀子の賢さを表わす成語の一つだと思います。普通の人のものの考え方は、利益に目がくらみ、そしてその裏に隠されている害を見抜くことはなかなかできません。しかし、賢者というものは、その利にとらわれていないがゆえに、その裏に潜む害を理解することができるのです。
そして、偉大な聖者は「すべての喜びの利益の裏側に害が存在する、つまり〝味著〟という利と、それから〝過患〟という害が必ず表裏として存在しているのである。よって、味著と過患から出離することが最も大切なんだ」と説き明かすわけです。そこで、

出家があり、修行があり、悟りがあり、解脱が生じます。この最高の眼識を有した魂――、それこそがサキャ神賢なのです。

さあ、あなたも、少なくともすべての現象の利益の裏には必ず害が潜んでいるんだというものの考え方に今日からしっかりと立ち、そして、正しい人生、間違いのない人生を歩こうではありませんか。



❖言(げん)は禍(わざわ)いを召(まね)く有(あ)り

［荀子、勧学］　言有召禍也、行有招辱也。君子慎其所立乎。

【書き下し文】
言(げん)は禍(わざわ)いを召(まね)くこと有(あ)り、行(こう)は辱(はずか)しめを招(まね)くこと有り。君子は其(そ)の立つ所を慎(つつし)むかな。

【訳】
言葉によっては災いを招くことがあるし、行為によっては辱しめを受けることがある。
君子は自分の立場に慎重にならなければならないのだなあ。

【類句】
・禍いは口より出ず



今日の故事成語は、「言は禍いを招く有り」です。

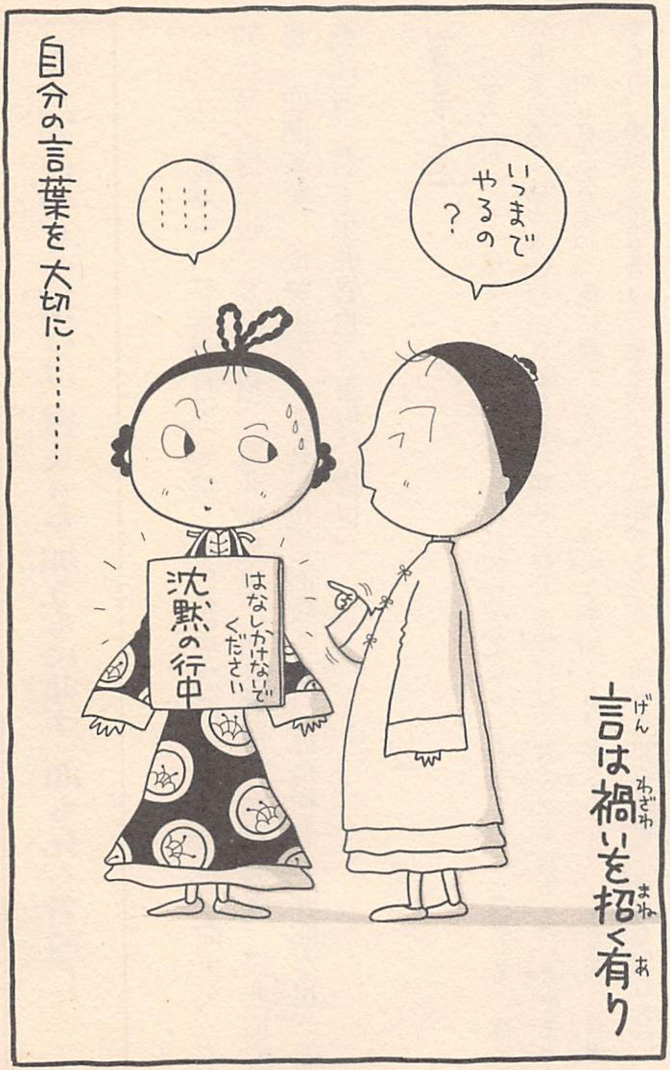
これは、確かにわたしたちが注意をしなければならない一つの実践だと思われます。

つまり、わたしたちが不用意に吐いた言葉によって、わたしたち自身が苦しまなければならないこと、あるいは、今まで仲の良かった友人関係が壊れるといったような現象は多々存在します。

したがって、真理の実践においては、必ず、ある一定の期間〝沈黙の行〟に徹し、そして、自分自身の言葉について徹底的に思索を繰り返します。そして、完全に言葉が自分の心の投影として表現できるようになったとき、初めて言葉を発するようにするのです。

よく、インドの聖者が何年も口をきかないといった話がいろいろな説話に出てきますが、これはその期間中、言葉についての検討を繰り返しているわけです。そして、その達成をなすならば、言葉によって他人を害したり、あるいは自分自身が害されることはなくなります。

さあ、あなたも今日から自分の言葉を大切にしてほしいものです。


いつまでやるの?
……
はなしかけないでください
沈黙の行中
自分の言葉を大切に……
言は禍いを招く有り

❖高きに登りて招けば、臂長きを加うるに非ず、而も見る者遠し

［荀子、勧学］　吾嘗終日而思矣、不如須臾之所学也。吾嘗跂而望矣、不如登高之博見也。登高而招、臂非加長也、而見者遠。順風而呼、声非加疾也、而聞者彰。仮輿馬者、非利足也、而致千里。仮舟楫者、非能水也、而絶江河。君子生非異也。善仮於物也。

【書き下し文】

吾嘗て終日にして思うも、須臾の学ぶ所に如かざるなり。吾嘗て跂ちて望むも、高きに登るの博く見ゆるに如かざるなり。高きに登りて招けば、臂長きを加うるに非ざるなり、而も見る者遠し。風に順いて呼べば、声疾きを加うるに非ざるなり、而も聞く者彰かなり。輿馬を仮る者は、足を利するに非ざるなり、而も千里を致す。舟楫を仮る者は、

水を能くするに非ざるなり、而も江河を絶る。君子は生異なるに非ざるなり。善く物に仮ればなり。

【訳】

わたしはかつて一日中思案したが、少しの間学んだことには及ばなかった。わたしはかつてつま先立って遠くを望み見たが、高い所に登ったときの遠く広く見わたせることには及ばなかった。高い所に登って手招きすれば、腕が長さを増すわけではないが、遠くからでもよく見える。風向きに従って呼べば、声が速さを増すわけではないが、明瞭に聞こえる。車と馬を利用する者は、足が強いわけではないが、千里を行くことができる。舟と櫂を利用する者は、泳ぎがうまいわけではないが、大河を渡ることができる。君子も生まれつき普通の人と異なっていたわけではない。物を上手に利用したまでである。

今日の故事成語は、ちょっと長い故事成語です。「高きに登りて招けば、臂長きを加うるに非ず、而も見る者遠し」です。

この意味は、高い所から手招きをすると、肘が長くなったわけではないのに、遠くからよく見える。あるいは、風上から風下に向かって声を発すると、よく声が通るというたとえです。

ところで、この故事成語に対して、荀子は一つの過ちを犯しています。それは、風上から風下に対して発するときの声のスピードと風下から風上に対して発するときの声のスピードが違うにも関わらず、彼は同じだと説いているからです。

まあそれはいいとして、できるだけあるものを多く利用し、そして有効な知識を得、その知識によってすべてに処する、つまり対処するということは、大きな利益をわたしたちに与えます。

しかし、あくまでも学は学です。その学をしっかりと自分の中に修め、それをもとに記憶修習し、そして思索し、その学の本質を見抜くことこそ、より崇高なことなのです。

もし、荀子がこれに気づいたら、政治というけがれた世界から足を洗い、偉大な聖者に

なったことでしょう。

さあ、あなたもできるだけ多くのものを活用し、そしてより崇高な人間に至ってください。



❖欹器

［荀子、宥坐］　孔子観於魯桓公之廟、有欹器焉。孔子問於守廟者曰、「此為何器。」守廟者曰、「此蓋為宥坐之器。」孔子曰、「吾聞宥坐之器者、虚則欹、中則正、満則覆。」孔子顧謂弟子曰、「注水焉。」弟子挹水而注之。中而正、満而覆、虚而欹。孔子喟然而歎曰、「吁、悪有満而不覆者哉。」

【書き下し文】

孔子魯の桓公の廟を観るに、欹器有り。孔子廟を守る者に問いて曰く、「此れ何の器と為すや」と。廟を守る者曰く、「此れ蓋し宥坐の器と為さん」と。孔子曰く、「吾聞く、宥坐の器なる者は、虚なれば則ち欹き、中なれば則ち正しく、満つれば則ち覆る」と。孔子顧みて弟子に謂いて曰く、「水を注げ」と。弟子水を挹みて之に注ぐ。中にして正し

く、満ちて覆り、虚にして欹く。孔子喟然として歎じて曰く、「吁、悪くんぞ満ちて覆らざる者有らんや」と。

【訳】

孔子が魯の桓公の霊廟を拝観したとき、傾いた器があった。孔子が霊廟を守る役人に尋ねていうには、

「これは何という器ですか」と。

霊廟を守る役人がいうには、

「これは恐らく座右の戒めの器というものでしょう」と。

孔子がいうには、

「座右の戒めの器というものは、空っぽのときには傾き、半分ぐらい水が入ったときには真っすぐになり、いっぱいに入ったときにはひっくり返ると、わたしは聞いています」と。

そこで、孔子は振り返って、弟子に告げていうには、

「水を注ぎなさい」と。

弟子が水をくんでその器に注ぐと、半分ぐらいで真っすぐになり、いっぱいになるとひっくり返り、空っぽになると傾いた。孔子がため息をついて嘆いていうには、「ああ、どうしていっぱいになってひっくり返らないものがあろうか」と。

【注】

・欹器——これを「攲器」と表記することもある。ここでは、影宋台州本や元刻纂図互註本に従った。

・魯の桓公——春秋時代、魯の君主。


からっぽだと
力がなくて
不安定だし…
ひくっ!!
半分くらい
だと
安定!!
力もあり 謙虚さもあり……
いっぱいだと
ひっくり
返るし…

今日の故事成語は、「欹器」です。「欹器」とは、傾いた器のことをいいます。
わたしたちは、自分自身がまだ力のないとき、大変謙虚な心を持ちます。しかし、実力がつき、お金ができ、権力が身につくと、その座におぼれ、おごり高ぶるようになります。ところが、このおごりや高ぶりは、例えば政界の失脚等を見てもわかるとおり、身の破滅へとつながるのです。
ところで、これらの諸現象に対して、真理の教えでも同じように戒めを説いています。それは上分結の捨断――、つまり高い世界へ至り、高い世界からより最高の世界へ至るための教えの中に、〝慢の捨断〟というのがあります。この慢とは、自己満足、つまり、自分自身の今の状況におぼれている様子を表わしています。そして、これを捨断してこそ、わたしたちはより高い世界へ至り、そして最終的には、大完全煩悩破壊界へと至ることができるのです。
したがって、皆さんも地位・権力、あるいは、より優れた要素を他より持っている場合でも、決しておごり高ぶらないようにしましょう。
ところで、真理の教えでは、もう一つの教えを説いています。それは、誤ったかたち

の謙虚はマイナスであるということです。つまり、自分のなしたことはなしたこと、あるものはあるもの、ないものはないもの、なしていないことはなしていないこととしてはっきりと表現し、それにのっとって生きる――、これこそが最高であると説いているのです。確かにそのとおりです。それこそ心と行動の一致ということになるでしょう。

さあ、皆さんも今日から心と行動の一致、これを目指して頑張りましょう。



❖鳥窮すれば則ち啄む

〔荀子、哀公〕　顔淵対曰、「臣聞之、鳥窮則啄、獣窮則攫、人窮則詐。自古及今、未有窮其下而能無危者也。」

【書き下し文】

顔淵対えて曰く、「臣之を聞く、鳥窮すれば則ち啄み、獣窮すれば則ち攫み、人窮すれば則ち詐ると。古より今に及ぶまで、未だ其の下を窮せしめて能く危きこと無き者有らざるなり」と。

【訳】

顔淵が（定公に）お答えしていうには、

「わたしはこう聞いております。『鳥は限界まで追いつめられるとつっついてくるし、獣は限界まで追いつめられるとつかみかかってくるし、人は限界まで追いつめられると嘘をつく』と。昔から今に至るまで、下の者を限界まで追いつめて危険がなかったという上の者は、まだ一度もあったためしがありません」と。

【注】
・顔淵——春秋時代、魯(ろ)の人。孔子の一番弟子。名は回(かい)、字(あざな)は子淵(しえん)。
・定公——春秋時代、魯の君主。哀公(あいこう)の父。

今日の故事成語は、「鳥窮すれば則ち啄む」です。

これは普段はあまり攻撃的でない鳥でも、窮地に追い込まれると、くちばしでつつく。つまり、人を追い込むと、人は嘘をついたり、あるいは最後の力を振り絞り逆襲に出るというたとえです。確かにこのたとえは正しいと思います。

ところで、人を責めることそのもの自体、わたしはあまり感心しません。なぜならば、その対象のなしている行為における自分自身の苦しみは、あくまでも自分自身の内側にあるカルマの清算にすぎないからです。

したがって、人を追い込まないではなく、もう一歩突っ込んで、人に施す——、つまり、真理の第一段階である布施の実践をもし皆さんがなさるならば、皆さんにはより大きな徳が満ち、そして、本当の意味で豊かな生活が待っているでしょう。

布施の実践が

鳥窮すれば則ち啄む


真理の第一歩です!
「追いこまない」よりもう一歩突っ込んで「施す」!
はやく元気になってね……

❖炮烙の刑

［荀子、議兵］　紂刳比干、囚箕子、為炮烙刑、殺戮無時。

［注］列女伝曰、「炮烙謂膏銅柱、加之炭上、令有罪者行焉。輒墜火中、紂与妲己大笑。」

【書き下し文】

紂は比干を刳き、箕子を囚え、炮烙の刑を為し、殺戮に時無し。

［注］列女伝に曰く、「炮烙とは銅柱に膏し、之を炭上に加え、罪有る者をして行かしむるを謂う。輒ち火中に墜つれば、紂と妲己とは大いに笑う」と。

【訳】
紂王は比干の胸を切り裂き、箕子を獄に入れ、火あぶりの刑を設けて、随時殺戮を続けた。

［注］
『列女伝』にいうには、
「炮烙とは、銅柱に油を塗って炭火の上に渡し、その上を罪人に歩かせる刑罰をいう。罪人が火中に滑り落ちるごとに、紂王と妲己とは大笑いした」と。

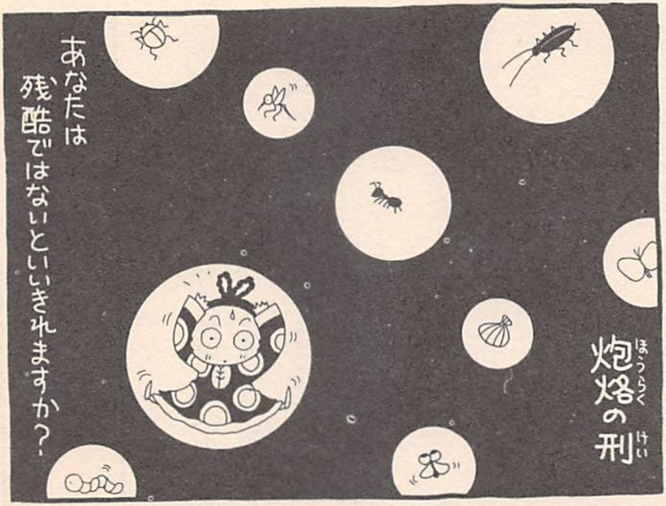
【注】
・紂王――殷の最後の王。夏の桀王と併せて、暴虐無道の代表とされる。
・比干――殷の忠臣。紂王のおじ。紂王の暴虐を諫め、胸を裂かれて殺された。箕子・微子と並んで殷の三仁の一人とされる。
・箕子――殷の人。紂王の叔父。紂王を諫めたが聞き入れられず、狂人のまねをして身を保った。周の武王が即位すると、朝鮮に封じられた。比干・微子と並んで殷の三仁の

一人とされる。
・妲己――殷の紂王の妃。有蘇氏の女で、姓は己、字は妲。淫乱残忍で、殷の滅亡の因となった。

＊

今日の故事成語は、「炮烙の刑」です。
「炮烙の刑」とは、殷最後の王である紂王が、人民に対してなした残酷な刑罰のことです。この「炮烙の刑」は、火のついた炭火の上に柱を通し、その上に油を塗り、そして人々がその柱を渡る途中で滑り落ち、炭火によって焦げる様を見るといったような趣向から出ています。

さて、この愛欲の世界には六つの世界が存在しています。その最も下の世界を〝地獄〟と真理では呼んでいます。わたしもこの地獄には何度か行ったことがありますが、その一つ〝鉄板焼地獄〟というのがあります。これは、一面が鉄板で、その鉄板はかなり高い温度になっています。そして、その上を歩くのです。もちろん、足の皮が焼け、ただれ、焼け落ち、というかたちでどんどん歩けなくなり、そしてしまいには体全体が焼け、



そこで死にます。そしてまた生まれ変わります。

ところで、このような残酷な刑、「炮烙の刑」にしろ、あるいは地獄の鉄板焼の刑にしろ、確かにわたしたちは嫌なことだということはできるでしょう。しかし、わたしたち自体、他の生き物に対して同じことをやっているんだということを認識したとき、心にハッとしたものを感じるはずです。

さあ皆さん、魂はすべて平等です。そしてすべての魂に対して本当に慈しみの心ができたとき、あなたはこれらの「炮烙の刑」や、あるいは「鉄板焼の刑」から逃れることができるんですよ。

❖遊べば必ず士に就く

［荀子、勧学］　蓬生麻中、不扶而直。蘭槐之根、是為芷。其漸之滫、君子不近、庶人不服。其質非不美也、所漸者然也。故君子居必択郷、遊必就士、所以防邪僻而近中正也。

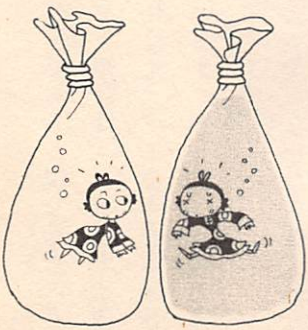
【書き下し文】

蓬麻中に生ずれば、扶けずして直し。蘭槐の根、是を芷と為す。其の之を滫に漸さば、君子も近づけず、庶人も服せず。其の質美ならざるに非ざるなり、漸す所の者然るなり。故に君子は居は必ず郷を択び、遊べば必ず士に就くは、邪僻を防ぎて中正に近づく所以なり。

【訳】

曲がった蓬(よもぎ)も麻の中に生えると、支えがなくても真っすぐになる。蘭(らん)や槐(えんじゅ)の根は香料となるが、もし尿にひたせば、君子もそばに近づけないし、庶民も身につけようとしない。これは、その本質が良くないというのではなく、ひたしたものがそうさせたのである。

したがって、君子が必ず環境のよい所を選んで住み、必ず賢士について交際するのは、邪悪に流れるのを防ぎ、中正に近づこうとするためなのである。



今日の故事成語は、「遊べば必ず士に就く」です。

これは、交際する相手は必ず崇高な魂、偉大な聖者であるべきであると説く荀子の考え方です。もちろん、同じことを真理でも説いています。サキャ神賢は「よき友と交際しなさい」と、そして「よき友と交際するということは、それはすべての偉大なる善法の初めであり、半ばであり、そして最後なんだよ」と説いています。そして、そのよき友とは、自分自身、つまりサキャ神賢自身であると説いているのです。

ところで、この法則はまさに正しいということができるでしょう。なぜならば、わたしたちは外的な情報、つまり正しい法則やあるいは間違った法則を取り入れながら生きています。そして、もし正しい法則のみで生きるとするならば、その魂は時とともに変化し、そして、偉大なる生命体に変化することでしょう。

したがって、あなたも交際する相手、おつきあいをする相手に十分に気をつけ、あなたより崇高な人を選んでください。


遊べば必ず士に就く
ここが別れ道だわ
偉大なる生命体に変化するために!!

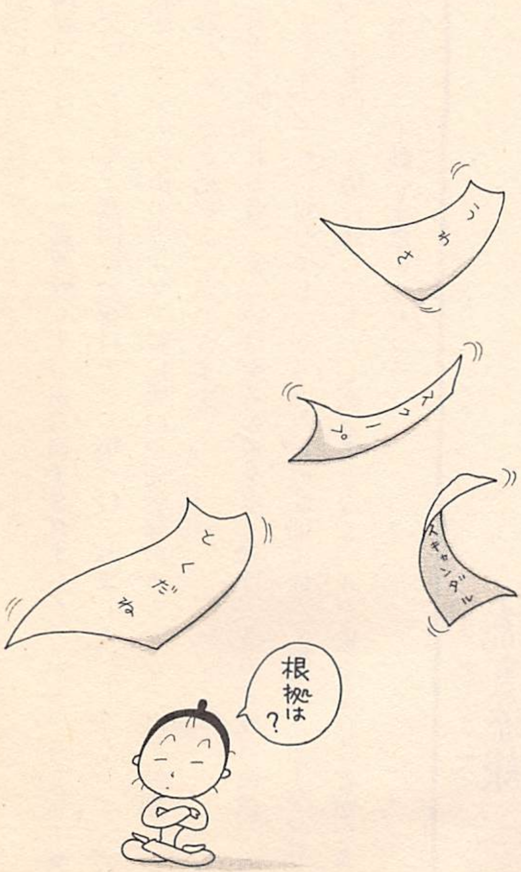
❖流言流説（りゅうげんりゅうせつ）

［荀子、致士］　凡流言流説、流事流謀、流誉流愬、不官而衡至者、君子慎之。

【書き下し文】
凡そ流言流説、流事流謀、流誉流愬の官せずして衡に至る者は、君子之を慎む。

【訳】
およそ根拠のない言説、根拠のない計略、根拠のない栄誉や告訴で、正当な道によらずに勝手に来るものに対しては、君子は慎重に対処する。

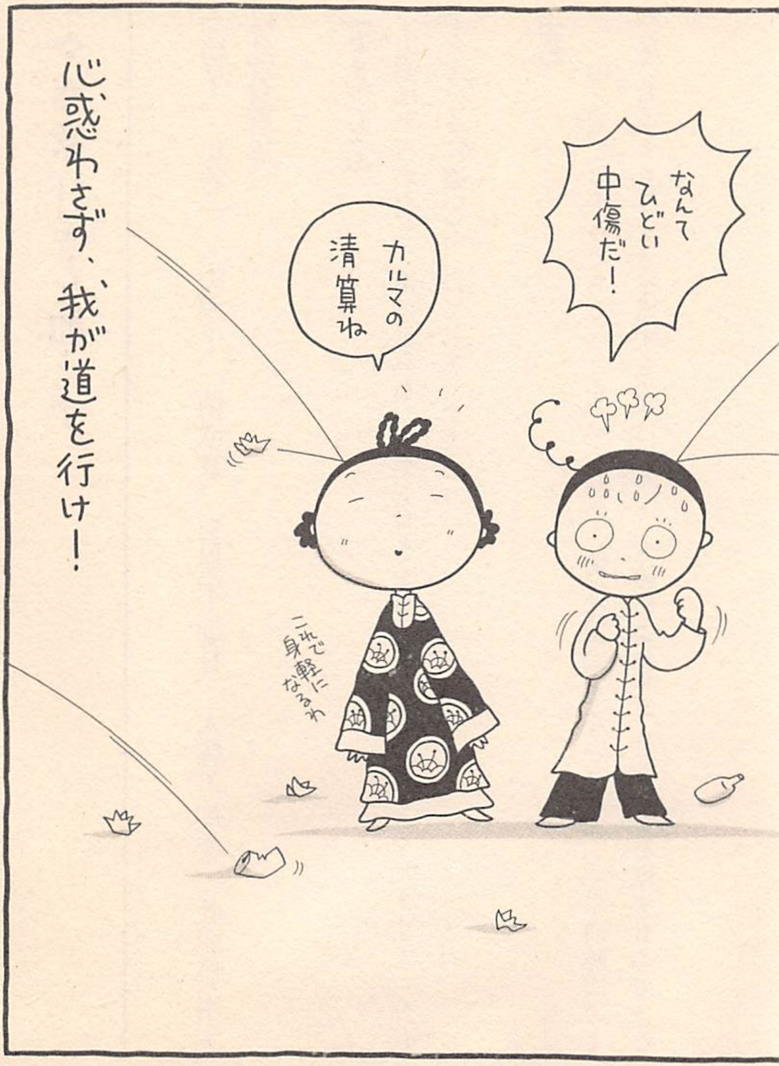
【類句】
・流言蜚語（りゅうげんひご）



流言流説



今日の故事成語は、「流言流説」です。
この「流言流説」では、オウム真理教もずいぶん悩まされました。いろいろな根も葉もない噂が飛び交い、そして、教団の名誉は大きく傷つけられました。しかし、よく考えてみると、教団一人一人の口のカルマ、特に悪口や両舌等のカルマが、この時期に一気に清算された形となったと見ることができます。
したがって、君主と呼ばれる者、あるいは聖者の道を歩く者は、この「流言流説」の本質を見抜き、そして、それに対してしっかりと真理の法則に従って解答を出すならば、周りのいかなる〝中傷的〟な噂に対しても、心惑うことなく、我が道を進むことができるのです。したがって、不動心を培いましょう。


なんてひどい中傷だ！
カルマの清算ね
これで身軽になるわ
心惑わさず、我が道を行け！

❖芻豢甘きを加えず

「荀子、正名」　山淵平、情欲寡、芻豢不加甘、大鐘不加楽、此惑於用実、以乱名者也。

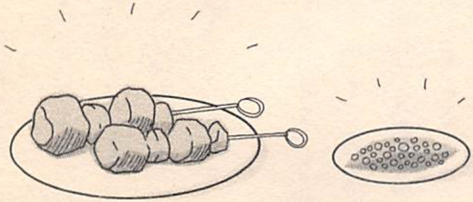
【書き下し文】

山淵は平らかなり、情は欲寡なし、芻豢甘きを加えず、大鐘楽しきを加えずと、此れ実を用いるに惑いて、以て名を乱す者なり。

【訳】

「山と淵とは平らである」とか、「人間の心情は欲望が少ない」とか、「牛肉豚肉のようなごちそうもうまさを増すものではなく、大鐘による音楽も楽しさを増すものではな

い」とかいう表現は、実体の用い方を誤って名辞を混乱させるものである。



今日の故事成語は、「芻豢（すうかん）甘（あま）きを加（くわ）えず」です。

このことわざは、ご馳走と、それから粗末な食べ物とが同じであるという考え方に対する批判、つまり、うまいものはうまいものであるし、粗末なものは粗末なものである。そしてそのようなものの見方によって、つまり、荀子（じゅんし）流に言えば、正しい識別によって現象を見ない限り、世の中は正しく治まらないと説く、荀子独特の成語ということができるでしょう。

ところで、真理の立場から見るならば、これに対してわたしは反論があります。なぜならば、多くの生き物は、自分の好むものこそおいしいと考えているからです。例えば草食動物は、草や野菜のようなものをおいしいと考えるでしょうし、逆に肉食動物は、肉、特に生きたものをそのまま捕らえ、殺して食べることこそおいしいと考えることでしょう。つまり、人それぞれは、それまでの経験の構成によって判断しているだけなのです。もしここに荀子が気づいたならば、より偉大な生命体になったことは間違いありません。

したがって、皆さんも自分の目で現象を見るのではなく、真理の目で現象を見、そし

て自分自身をその真理に対して合わせていく、つまり真理によって統御するようにしようではありませんか。



❖良医の門、病人多し

［荀子、法行］ 南郭恵子問於子貢曰、「夫子之門、何其雑也。」子貢曰、「君子正身以俟。欲来者不距、欲去者不止。且夫良医之門、多病人、隠栝之側、多枉木。是以雑也。」

【書き下し文】

南郭恵子 子貢に問いて曰く、「夫子の門、何ぞ其れ雑なるや」と。子貢曰く、「君子は身を正して以て俟つ。来らんと欲する者は距まず、去らんと欲する者は止めず。且つ夫れ良医の門、病人多く、隠栝の側ら、枉木多し。是を以て雑なり」と。

【訳】
南郭恵子が子貢に尋ねていうには、
「あなたの先生の門下には、どうしてそんなに種々様々な人がいるのですか」と。
子貢がいうには、
「君子はわが身を正して他人を待ち受けます。来たいと思う者は拒まず、去りたいと思う者は引き止めません。そもそもいったい、名医のもとには病人が多く集まり、曲がりを直す、ため木のそばには曲がった木が多く集まります。こういう理由で、種々様々な人がいるのです」と。

【注】
・南郭恵子――孔子の弟子。その姓名は不詳。
・子貢――春秋時代、衛の人。孔子の弟子。端木賜の字。弁舌に巧みで金儲けの才もあった。

【類句】

・良医の門、疾人多し

・隠栝の側ら枉木多し

＊

今日の故事成語は、「良医の門、病人多し」です。

これは、名医のもとには多くの病人が集まるし、また、君子のもとには多くの弟子が集まると説く荀子の故事成語です。

確かに、昔は口伝えによって、君子のもとに多くの門弟が集まったことは疑いありません。しかし、現代ではマスコミが発達しています。このマスコミは、邪を正とし、正を邪とする力があるのです。したがって一概に、君子のもとに多くの門弟が集まるということはできないのです。わたしは、荀子の時代との差を感じざるを得ません。

しかし、これを真理の目に当てはめると、裏側の法則がよく理解できます。つまり、その君子が多くの者を導かなければならないカルマがあるとするならば、いかにマスコミが悪い影響を与えようとも、多くの素晴らしい門弟が集まってくるであろう。逆に、

その魂が君子だとしても、多くの人に法則を説くカルマがないとするならば、門弟は集まってこないだろうということです。

このように、真理と中国哲学の間には、一段階差が存在します。さあ、あなたも今日から早速真理を学びましょう。



❖楚王細腰を好んで、朝に餓人有り

「荀子、君道」　請問為国。曰、聞脩身、未嘗聞為国也。君者儀也。儀正而景正。君者槃也。民者水也。槃円而水円。君者盂也。盂方而水方。君射則臣決。楚荘王好細腰。故朝有餓人。故曰、「聞脩身、未嘗聞為国也。」

【書き下し文】

請う国を為むるを問わん。曰く、身を脩むるを聞くも、未だ嘗て国を為むるを聞かざるなり。君なる者は儀なり。儀正しくして景正し。君なる者は槃なり。民なる者は水なり。槃円くして水円し。君なる者は盂なり。盂方にして水方なり。君射れば則ち臣決す。楚の荘王細腰を好む。故に朝に餓人有り。故に曰く、「身を脩むるを聞くも、未だ嘗て国を為むるを聞かざるなり」と。

【訳】

国を治めることについてどうかお教えください。以下答える。

身を修めることについては聞いたことがあるが、国を治めることについては今まで聞いたことがない。君主は人民の模範である。模範が正しければ影も正しくなる。君主はたらいであり、人民は水である。たらいが丸ければ水も丸くなる。君主はおわんである。おわんが四角ならば水も四角になる。君主が弓を射れば、臣下は弓懸(ゆがけ)をつける。楚(そ)の荘王(そうおう)は腰の細い美人を好んだので、朝廷では餓死者が出た。

だから、「身を修めることについては聞いたことがあるが、国を治めることについては今まで聞いたことがない」といったのである。

【注】

・楚の荘王――春秋五覇の一人。しかし、『韓非子(かんぴし)・二柄(にへい)』や『戦国策(せんごくさく)・楚』によれば、このエピソードは楚の霊王(れいおう)のことだという。

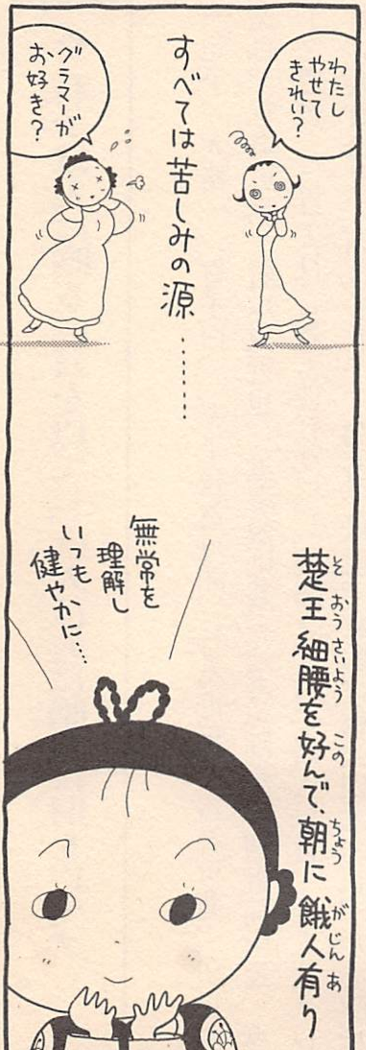
今日の故事成語は、「楚王細腰を好んで、朝に餓人有り」です。

これは、楚王が腰の細い女性を好んだがために、朝廷で餓死する者まで現われたということから、王の好みを国民が受け、その意をくもうとするたとえ、あるいは、そのような状態であるから、王というものは自分自身の好みを慎むべきであるとする荀子の考えから来た故事成語です。

確かに中国史を見ると、皇帝や王が、例えばやせたタイプの女性を好むと、その国の女性たちは皆食事を取らなくなりやせたという話がありますし、中には、それによって餓死をしたという話もあります。逆に、皇帝や王が太めのタイプを好むと、皆同じように、太めのタイプに女性たちが変わった等、中国史ではいたるところにそれに類する内容が書かれています。

しかし、これは明らかに、権力の構図を見ればよく理解できることです。もし、皇帝や王に寵愛されるとするならば、その女性の得る権力や財産、金銭といったものは、いったいどれほどのものでしょうか。ちょっと苦心し、そしてやせるだけで、もし皇帝の正妻や、あるいは側室にでもなろうものなら、それは確かに大きな力を得ることができる

のです。そういう意味においては、このような現象は自然の理といわざるを得ません。
しかし、やせた結果、例えば寵愛され、権力を得たとして、いったいそれが何になるでしょうか。それはすべて苦しみの源にすぎないのです。もし、その背景にある無常というものを理解するならば、それらの魂は、そのような無益徒労をなさず、いつも健やかに、そして心地よく、安楽に暮らすことができたはずです。
早くこの世の中が真理の世界になるといいですね。



❖君子(くんし)は人(ひと)に贈(おく)るに言(げん)を以(もっ)てし、庶人(しょじん)は人(ひと)に贈(おく)るに財(ざい)を以(もっ)てす

〔荀子、大略〕 曾子曰、「孝子言為可聞、行為可見。言為可聞、所以説遠也。行為可見、所以説近也。近者説則親、遠者説則附。親近而附遠、孝子之道也。」曾子行。晏子従於郊曰、「嬰聞之。君子贈人以言、庶人贈人以財。嬰貧無財、請仮於君子、贈吾子以言。乗輿之輪太山之木也、示諸檃栝三月五月、為幬菜敝、而不反其常。君子之檃栝不可不謹也。慎之。蘭茝槀本漸於蜜醴、一佩易之。正君漸於香酒、可讒而得也。君子之所漸不可不慎也。」

【書き下し文】

曾子(そうし)曰(いわ)く、「孝子(こうし)は言(げん)は聞くべきを為(な)し、行(こう)は見るべきを為す。言の聞くべきを為すは、

遠きを説ばしむる所以なり。行の見るべきを為すは、近きを説ばしむる所以なり。近き者説べば則ち親しみ、遠き者説べば則ち附く。近きを親しみて遠きを附くるは、孝子の道なり」と。曾子行る。晏子郊に従いて曰く、「嬰之を聞けり。『君子は人に贈るに言を以てし、庶人は人に贈るに財を以てす』と。嬰貧にして財無し、請う君子に仮りて、吾子に贈るに言を以てせん。乗輿の輪は太山の木なるも、諸を檃栝に示くこと三月五月ならば、幬菜敝るるを為すも、其の常に反らず。君子の檃栝は謹まざるべからざるなり。之を慎めよ。蘭茝槀本は蜜醴に漸さば、一佩之に易えん。正君香酒に漸さば、讒して得べけんや。君子の漸す所は慎まざるべからざるなり」と。

【訳】

曾子がいうには、

「親孝行な者は、言葉では聞くべき価値のあることを話し、行為では見るべき価値のあることを行なう。言葉で聞くべきことを話すのは、遠くの人を喜ばせるためであり、行為で見るべきことを行なうのは、近くの人を喜ばせるためである。近くの人が喜べば親

しみ、遠くの人が喜べばつき従ってくる。近くの人を親しませ、遠くの人をつき従わせるのは、親孝行な者としての道である」と。

曾子が（斉の都を）去るとき、晏子が郊外まで送ってきていうには、

「わたしはこう聞いています。

『君子は人に言葉を贈り、庶民は人に財物を贈る』と。

わたしは貧乏で財物がありませんから、仮に君子ということで、あなたに言葉をお贈りしたいと思います。

乗り物の車輪は、もとは泰山の木のような普通の木でしたが、それをため木にかけて三カ月五カ月経てば、車輪がばらばらになっても、もう元の形には戻りません。君子はため木については慎重にしなければなりません。くれぐれもご用心ください。蘭や茝や槀本などの香草は、甘い酒にひたしたならば、佩玉と交換できるほどになります。正しい君主が香ばしい酒ともいうべき環境に身をひたすならば、だれも悪口を言うことはできません。君子は我が身をひたすものについては用心しなければなりません」と。

【注】

・曾子——春秋時代、魯の人。孔子の弟子。名は参(しん)、字(あざな)は子輿(しよ)。親孝行の人として知られる。

・晏子——春秋時代、斉の宰相。名は嬰(えい)、字は仲(ちゅう)、謚(おくりな)は平(へい)。管仲(かんちゅう)と共に斉の名臣と称せられる。



今日の故事成語は、「君子は人に贈るに言を以てし、庶人は人に贈るに財を以てす」です。

これは、君子、つまり偉大なる魂が人に贈るものとして、善言、つまり相手を高める法則を贈ることを、庶人が財物を贈ることより貴いとした、荀子のいかにも宗教家的な言葉です。

もちろん、この善言は、確かに財よりも高いことは真理の教えの中においても同じようにいうことができます。わたしたちが一つの正しい法則を、もし偉大な聖者から聞き、それを実践したならば、確かに財よりも大きな利益を得ることは疑いありません。なぜならば、財とは消耗するもの、しかしその善言を実践するということは、それによってわたしたちは、多くの利益を増大させることができるのです。したがって、このような故事成語が使われるようになったのでしょう。

そして、皆さんも早く君子と同じレベルになり、善言によって人を幸福にすることができたらいいですね。


君子は人に贈るに言を以てし、庶人は人に贈るに財を以てす
相手を高め幸福にすることば
偉大な聖者のおっしゃることばは財物よりも価値があるわ

❖氷は水之を為して、水よりも寒し

［荀子、勧学］　君子曰、「学不可以已。青取之於藍、而青於藍、冰水為之、而寒於水。」

【書き下し文】

君子曰く、「学は以て已むべからず。青は之を藍より取りて、藍よりも青く、冰は水之を為して、水よりも寒し」と。

【訳】

君子がいうには、

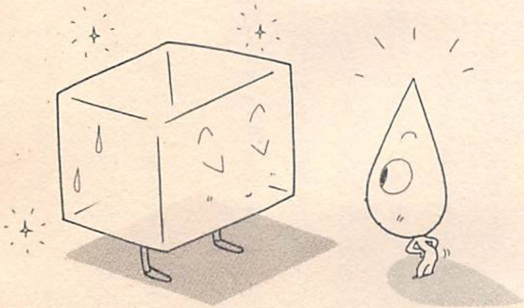
「学問は途中でやめてはならない。青色は藍の草から取るが、藍よりも青く、氷は水か

らできるが、水よりも冷たい」と。

【類句】

・青は藍より出でて、藍よりも青し

・出藍の誉れ



今日の故事成語は、「氷は水之を為して、水よりも寒し」です。

これは、水というものを凍らせれば氷になると。つまり、氷というものは、水から出て水よりも冷たいという意味です。まさに「出藍の誉れ」と同じたとえであるということができます。

ところで、わたしたちの人生というものはすべて経験の構成によって決まります。経験の構成によって人生が決まるとは、過去世においてなしたわたしたちの身の行ない、言葉、そして心の働きの集積が今の生を決定しているという考え方です。この考え方に基づくならば、もし今生、わたしたちがそれに加えて努力をし続けることにより、その経験の構成がより純化され、そして高められ、それによってわたしたちは生まれたとき以上の人生を歩くことができるのだという真理の教えと、この「氷は水之を為して、水よりも寒し」という成語とは同じ意味になるということになります。

したがって、皆さんがこの故事成語を記憶修習し、それによってより豊かな、より発展的な、より素晴らしい人生を送ることをお祈りいたします。


氷は水之を為して、水よりも寒し
経験の構成が人生を決めるわ
あなたは生まれたときのカルマを超えられるか……!!

❖芷蘭は深林に生ずるも、人無きを以て芳しからずんば非ず

［荀子、宥坐］　孔子南適楚、厄於陳・蔡之間。七日不火食、藜羹不糂、弟子皆有飢色。子路進問之曰、「由聞之、為善者、天報之以福、為不善者、天報之以禍。今夫子累徳積義懐美、行之日久矣。奚居之隠也。」孔子曰、「由、不識、吾語汝。汝以知者為必用邪、王子比干不見剖心乎。汝以忠者為必用邪、関竜逢不見刑乎。汝以諫者為必用邪、呉子胥不磔姑蘇東門外乎。夫遇不遇者時也、賢不肖者材也。君子博学深謀、不遇時者多矣。由是観之、不遇世者衆矣、何独丘也哉。且夫芷蘭生於深林、非以無人而不芳。君子之学、非為通也。為窮而不困、憂而意不衰也、知禍福終始而心不惑也。夫賢不肖者材也、為不為者人也、遇不遇者時也、死生者命也。今有其人、不遇其時、雖賢其能行乎。苟遇其時、何難之有。故君子博学深謀、修身端行、

以俟其時。」

【書き下し文】

孔子南のかた楚に適かんとして、陳・蔡の間に厄す。七日火食せず、藜羹糂せず、弟子皆飢色有り。子路進みて之に問いて曰く、「由之を聞く、善を為す者は、天之に報ゆるに福を以てし、不善を為す者は、天之に報ゆるに禍を以てすと。今夫子徳を累ね義を積み美を懐い、之を行うこと日久し。奚ぞ居の隠なるや」と。孔子曰く、「由、識らざるか、吾汝に語げん。汝知者を以て必ず用いらるると為すか、王子比干は心を剖かれざりしや。汝忠者を以て必ず用いらるると為すか、関竜逢は刑せられざりしや。汝諫者を以て必ず用いらるると為すか、呉子胥は姑蘇の東門外に磔せられざりしや。夫れ遇不遇は時なり、賢不肖は材なり。君子博学深謀にして、時に遇わざる者多し。是に由りて之を観れば、世に遇わざる者衆し、何ぞ独り丘のみならんや。且つ夫れ芷蘭は深林に生ずるも、人無きを以て芳しからずんば非ず。君子の学は、通ずるが為に非ざるなり。窮するも困しまず、憂うるも意衰えず、禍福終始を知りて心惑わざるが為なり。夫れ賢不肖は

材なり、為不為は人なり、遇不遇は時なり、死生は命なり。今其の人有るも、其の時に遇わざれば、賢なりと雖も其れ能く行われんや。苟も其の時に遇わば、何の難きことか之れ有らん。故に君子は博学深謀にして、身を修め行を端し、以て其の時を俟つなり」と。

【訳】

孔子は南方の楚の国に行こうとしたが、陳と蔡の両国のあたりで災厄に陥った。七日間も火で煮たものを食べることもできず、アカザの汁だけで米粒を交ぜることもできず、弟子たちはみな飢えた顔つきになった。そこで、子路が進み出てお尋ねしていうには、

「わたしはこう聞いています。

『善を行なう者には天は幸福によって報い、不善を行なう者には天は災難によって報いる』と。

今、先生は徳を重ね義を積み美を思い、長い間これを実践されてきました。どうして日常生活が窮迫するんですか」と。

孔子がいうには、

「由よ、わからないのか。わたしはお前に話そう。お前は知識ある者が必ず重用されると思っているのか。殷の王子であった比干は胸を切り裂かれたではないか。お前は忠義ある者が必ず重用されると思っているのか。夏の関竜逢は処刑されたではないか。お前は諫言する者が必ず重用されると思っているのか。呉の伍子胥は都の姑蘇の東門の外ではりつけにされたではないか。

そもそも、栄達するか不遇になるかは時勢によるのであり、賢者であるか愚者であるかは素質によるのである。博学で思慮深い君子でも、時勢に巡り合わなかった者は多いのだ。このことから考えると、時世に巡り合わなかった者は大勢いるのである。どうしてわたしだけのことであろうか。

そもそもいったい、芷や蘭のような香草は深い林の中に生えているが、人がいないからといって、かぐわしい香りを発しないということはない。君子の学問も同様に栄達するためのものではない。それは、困窮してもそれを苦しみとせず、心配事があっても意気が衰えず、災難と幸福や、物事の始まりと終わりの道理を知って、心に迷いを生じな

いためのものである。
そもそも、賢者であるか愚者であるかは素質によるのであり、行なうか行なわないかは人によるのであり、栄達するか不遇になるかは時勢によるのであり、死ぬか生きるかは天命によるのである。今ここにしかるべき人物がいても、しかるべき時勢に巡り合わなかったならば、たとえ賢者であっても、それを実践することができるだろうか。仮にしかるべき時勢に巡り合ったならば、どうして困難なことがあろうか。したがって、君子は博学で思慮深くし、身を修め行ないを正して、然るべき時勢が来るのを待つのである」と。

【注】
・子路——27ページ参照。
・比干——69ページ参照。
・関竜逢——夏の忠臣。桀王(けつおう)の暴政を諫めて殺された。
・伍子胥——春秋時代、楚の人。父と兄が楚の平王(へいおう)に殺されたので、呉王闔閭(こうりょ)に仕えて

楚に復讐し、さらに夫差に仕えたが、讒言により殺された。

【類句】

・芷蘭は深林に生ず



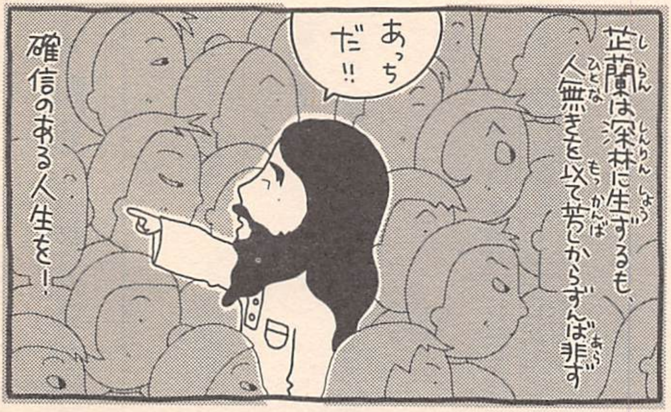
今日の故事成語は、「芷蘭は深林に生ずるも、人無きを以て芳しからずんば非ず」です。ちょっと長いですね。

これは、芷や蘭という花が深林に生じていたならば、人がいようといまいとそこでかぐわしい香りを発するというところから、偉大なる君子は、たとえ自分の説の価値を周りが認めなくとも、その法則を説き続けるというたとえです。

かく言うわたしも、真理の法則をこの日本に広めたところは、その法則の内容を理解する者はほとんどいませんでした。しかし、その法則の内容がテーラヴァーダ仏教や、あるいは大乗仏教の本筋と変わらないということが徐々に認められ、そして少しずつ少しずつですが、その真理の輪を広めることができるようになっています。

もちろん、教勢の拡大を考えるならば、今の日本人に迎合した法則を説けば簡単なわけですが、それではだれ一人として済度されることはありません。したがって、このことわざどおり、たとえ受け入れられなくとも、君子というものは堂々と自説を述べ、そしてその法則の広まるのを待つ以外に道はないのです。

このような堂々とした生き方ができるかどうかは、まさに、その法則の力を信じるか



否かにかかっています。そして、もう一歩深く突っ込んで考えるならば、真理の法則、特に、それによって生じる善と悪、あるいは、喜びと災いといったようなものの本質を見切る力があるかどうかにかかっているのです。つまり、もし自説を曲げたならば、それによって多くの人が正しくない法則を実践し、その報いは自分自身に返ってくるということを知っているならば、たとえ食を受けることができなくなったとしても、平然としてそれに耐えることができるはずです。

そしてわたし自身、このような確信のある人生を歩くことができることを、大変うれしく思っています。

あなたも、確信のある人生を歩いてみてはいかがでしょうか。

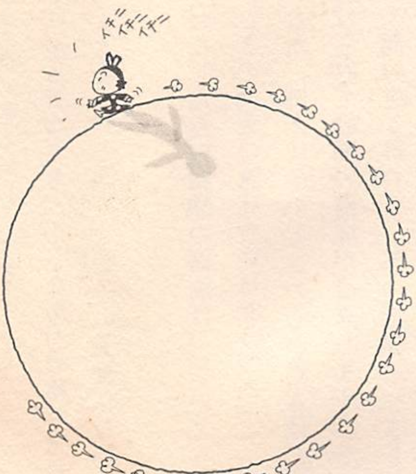
❖跬歩を積まざれば、以て千里に至る無し

［荀子、勧学］ 不積跬歩、無以至千里、不積小流、無以成江海。

【書き下し文】
跬歩を積まざれば、以て千里に至る無く、小流を積まざれば、以て江海を成す無し。

【訳】
一歩一歩と積み重ねていかなければ、千里の遠方に行き着くことはできないし、小さな流れの水が集まらなければ、大きな川や海になることはできない。

蹞歩を積まざれば、以て千里に至る無し



今日の故事成語は、「蹞歩(きほ)を積(つ)まざれば、以(もっ)て千里(せんり)に至(いた)る無(な)し」です。

これは、要するに一歩一歩の積み重ねが千里に至る。つまり、小さな努力の積み重ね、絶え間ない努力の積み重ねこそが、大事を達成できるんだと説く、荀子(じゅんし)の大乗仏教的な見解です。

ところで、この考え方は真理にも通じます。わたしたちの経験の構成は、このように一歩一歩、日々何をなしているか、例えばそのときの言葉の意味合いはどうであったか、例えばそのときの行為の意味合いはどうであったか、例えばそのときの心の働きはどうであったかというようなものが一つ一つ積み上げられて経験の構成が成立します。そして、その要素が神々になったとき、初めてこの人間の生が終わり、天の世界、つまり神の世界へ至ることができるのです。

したがって、皆さんも一歩一歩、休まずたゆまず精進をし続けてください。


蹞歩を積まざれば、以て千里に至る無し
○月×日
今日、わたしは
ウソをついてしまいました
ザンゲします
……
今日一日、あなたは何をしましたか?

❖輿馬を仮る者は、足を利するに非ざるなり。而るに千里を致す

［荀子、勧学］　仮輿馬者、非利足也、而致千里。仮舟楫者、非能水也、而絶江河。

【書き下し文】
輿馬を仮る者は、足を利するに非ざるなり、而るに千里を致す。舟楫を仮る者は、水を能くするに非ざるなり、而るに江河を絶る。

【訳】
車と馬を利用する者は、足が強いわけではないが、千里を行くことができる。舟と櫂を利用する者は、泳ぎがうまいわけではないが、大河を渡ることができる。

【類句】

・輿馬を仮る者は、足労せずして千里を致す



今日の故事成語は、「輿馬を仮る者は、足を利するに非ざるなり。而るに千里を致す」です。

これは、馬や車を使う人は歩くスピードを速めるわけではない。しかし、千里の道を到達することができるという意味です。

ところで、荀子のものの考え方の中に、一つ大きな過ちがあります。それは人間、生まれたときは一緒であるとする考え方です。わたしはこの考え方に反対の立場をとっています。なぜならば、人間の要素というものは、経験の構成によって決定されるからです。例えば、それは父母の善し悪し、あるいは生まれたときの身体の強健度、あるいは智性の状態等がそれに充てられるわけです。もちろん、これらの要素を研ぎ澄ますもの、それは学問であり、あるいは修養であり、あるいはそれよりもう一歩進んだ修行であるということはできます。

そして、もちろん最高の人間が努力をしない場合、それより若干劣っているが努力をした者がそれを追い越すことは可能でしょう。しかし、生まれつきの差というものはそれぞれが保有しているわけです。これについて、荀子が深く理解をしたとしたならば、

もっともっと深い法則を中国に残すことはできたはずです。

ともかく、生まれの条件を克服する道——、それは、正しい真面目な努力しか存在しないのです。



❖ 三不祥

［荀子、非相］ 人有三不祥。幼而不肯事長、賤而不肯事貴、不肖而不肯事賢。是人之三不祥也。

【書き下し文】

人に三不祥有り。幼にして長に事うるを肯んぜず、賤にして貴に事うるを肯んぜず、不肖にして賢に事うるを肯んぜず。是れ人の三不祥なり。

【訳】

人には三つの不吉なことがある。未熟なのに優秀な者に仕えることを承知しない。卑賤なのに高貴な者に仕えることを承知しない。愚かなのに賢者に仕えることを承知しな

い。これが人としての三つの不吉なことである。

［晏子春秋、諫下］　景公出猟、上山見虎、下沢見蛇。帰召晏子而問之曰、「今日寡人出猟。上山則見虎、下沢則見蛇。殆所謂不祥也。」晏子対曰、「国有三不祥。是不与焉。夫有賢而不知、一不祥。知而不用、二不祥。用而不任、三不祥。所謂不祥、乃若此者。今上山見虎、虎之室也。下沢見蛇、蛇之穴也。如虎之室、如蛇之穴而見之、曷為不祥也。」

【書き下し文】

景公出猟し、山に上りて虎を見、沢に下りて蛇を見る。帰りて晏子を召して之に問いて曰く、「今日寡人出猟す。山に上れば則ち虎を見、沢に下れば則ち蛇を見る。殆んど所謂不祥なり」と。晏子対えて曰く、「国に三不祥有り。是れ与からず。夫れ賢有りて知らざるは、一の不祥なり。知りて用いざるは、二の不祥なり。用いて任ぜざるは、三の不祥なり。所謂不祥は、乃ち此くの若き者なり。今山に上りて虎を見るは、虎の室な

ればなり。沢に下りて蛇を見るは、蛇の穴なればなり。虎の室に如き、蛇の穴に如きて之を見る、曷為れぞ不祥ならん」と。

【訳】

景公が猟に出たとき、山に登ると虎に会い、沢を下ると蛇に会った。帰ってから、晏子を呼び寄せて尋ねていうには、

「今日わたしは猟に出た。山に登れば虎に会ったし、沢を下れば蛇に会った。多分、これが不吉なことというものだろう」と。

晏子がお答えしていうには、

「国には三つの不吉なことがありますが、そのこととは関係がありません。そもそも賢者がいても知らないのは、第一の不吉なことです。知っていても登用しないのは、第二の不吉なことです。登用しても任用しないのは、第三の不吉なことというもの、それはこのようなものなのです。

今日、山に登って虎に会いましたのは、それが虎のすみかだったからです。沢に下っ

て蛇に会いましたのは、それが蛇の穴だったからです。虎のすみかに至って虎に会い、蛇の穴に至って蛇に会ったのです。どうして不吉なことがありましょうか」と。

【注】

・景公——春秋時代、斉の君主。

・晏子——95ページ参照。



今日の故事成語は、「三不祥」です。

「三不祥」とは、三つの不吉なことという意味です。この三不祥は二つの定義がなされます。

最初の定義は、斉の晏嬰という宰相が唱えた三不祥です。第一に、国に聖者がいるのに王がその聖者を知らないこと。第二は、王はその聖者を知ってはいるけれども政治に登用しないこと。第三は、その聖者を登用してはいるが重く用いないこと。

そして、それに対して、荀子は三つの不吉なこととして、第一に、未熟な者が秀でた者に仕えないこと。第二に、徳のない者が徳のある者に仕えないこと。そして第三に、愚かな者が賢い者に仕えないことの三つを挙げています。

確かに、これらの三つは、国を衰退させ、そして滅ぼす前兆となることでしょう。

中国の歴史を見ると、多くの賢者、多くの聖者が登場します。しかし、それらが用いられた時代というのは、本当にわずかで、そして、それらの賢者や聖者が用いられなくなって国は滅んでいきます。例えばこの例としては、唐の太宗、李世民。彼の時代に、玄奘三蔵が登場し、そして李世民が重く用いたことが史実として記されています。そし

て、唐は大発展を遂げます。これらのように、もし聖者を重く用いるならば、その国は必ず大発展をするはずです。

ところで、今この日本、いったいどのような聖者や賢者が政治の中枢に携わっているのでしょうか。



❖我を非として当たる者は吾が師なり

［荀子、脩身］　非我而当者吾師也。是我而当者吾友也。諂諛我者吾賊也。故君子隆師而親友、以致悪其賊、好善無厭、受諫而能戒。雖欲無進得乎哉。

【書き下し文】

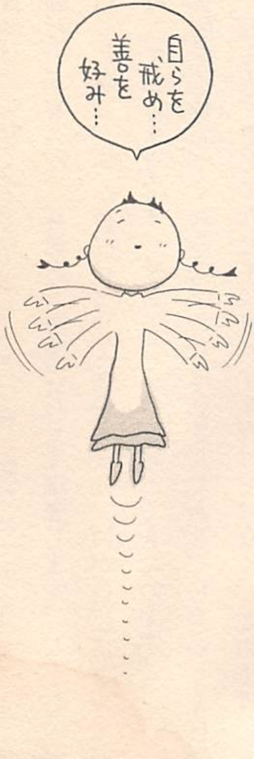
我を非として当たる者は吾が師なり。我を是として当たる者は吾が友なり。我に諂諛する者は吾が賊なり。故に君子は師を隆びて友に親しみ、以て致めて其の賊を悪み、善を好み厭くこと無く、諫めを受けて能く戒む。進むこと無からんと欲すと雖も得んや。

【訳】

わたしのことを悪いとして当たる者は、わたしの師である。わたしのことをよいとし

て当たる者は、わたしの友である。わたしに媚びへつらう者は、わたしを害する者である。

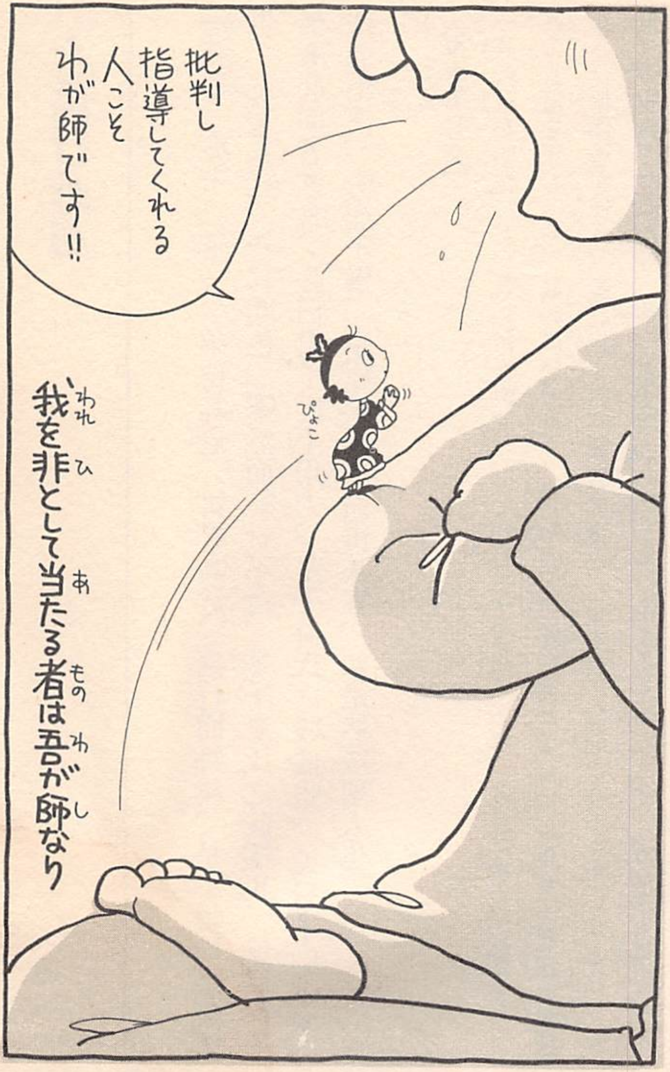
したがって、君子は師を尊んで友に親しみ、自分を害する者を大変嫌い、あくまでも善を好み、人の諫言(かんげん)を受け入れて自らを戒めることができる。向上したくないと思っても、どうして向上せずにいられようか。



今日の故事成語は、「我を非として当たる者は吾が師なり」です。もともと人間というものは、耳逆らう言葉に対して嫌悪します。しかし、荀子のような聖者の域に達した者は、何が自己にとって利益となり、何が自己にとって不利益となるかをよく洞察しているようです。そして、この成語ができたのです。

自分自身の長所を称賛してくれる人、これは良き友であり、しっかりと自分自身の欠点を批判してくれる人、そしてただ単に批判するだけではなく、どのようにしたらその欠点を取り除くことができるかを指導する人、これが師であると。そして、自分自身に媚びへつらう人、これは最も自分を害する者である。——さすが、荀子の言葉だと思います。

この法則は、まさに真理の法則と何ら変わるところはありません。したがって皆さんも、大きな心を持って自分を批判する人の言葉を聞き、もしその要素が自分にあると理解できたならば、それを取り除くように努めようではありませんか。


批判し
指導してくれる
人こそ
わが師です!!
ぴよこ
我を非として当たる者は吾が師なり

❖禹行舜趨

［荀子、非十二子］　弟佗其冠、衶禫其辞、禹行而舜趨、是子張氏之賤儒也。正其衣冠、斉其顔色、嗛然而終日不言、是子夏氏之賤儒也。偸儒憚事、無廉恥而耆飲食、必曰君子固不用力、是子游氏之賤儒也。彼君子則不然。佚而不惰、労而不僈、宗原応変、曲得其宜、如是然後聖人也。

【書き下し文】

其の冠を弟佗にし、其の辞を衶禫にし、禹行して舜趨するは、是れ子張氏の賤儒なり。其の衣冠を正しくし、其の顔色を斉え、嗛然として終日言わざるは、是れ子夏氏の賤儒なり。偸儒事を憚り、廉恥無くして飲食を耆み、必ず君子は固より力を用いずと曰うは、是れ子游氏の賤儒なり。彼の君子は則ち然らず。佚なるも惰ならず、労なるも僈ならず、

原に宗し変に応じ、曲に其の宜しきを得、是の如くにして然る後に聖人なり。

【訳】

その冠をだらしなくかぶり、その言葉はあっさりしていて、禹王のように歩き、舜帝のように走るのは、子張派の末流の儒者である。その衣服と冠を正しくし、その顔色を整えて、満足げに一日中ものを言わないでいるのは、子夏派の末流の儒者である。怠惰で仕事を嫌がり、恥知らずで飲食を好み、決まって「君子はもともと力を使わない」と言うのは、子游派の末流の儒者である。

かの君子とは、そのようなものではないのだ。安逸な境遇にいても怠らず、骨の折れるときでもいい加減にせず、根本に基づいて変化に応じ、もれなくその道理にかなっている。このようであってこそ初めて聖人といえるのである。

【注】

・禹王――23ページ参照。

・舜帝――中国古代の聖天子。五帝の一人。堯帝と並び賞される。
・子張――春秋時代、陳の人。孔子の弟子。顓孫師の字。言行を慎んだことで有名。
・子夏――春秋時代、衛の人。孔子の弟子。卜商の字。文学に優れ、孔子の詩学を伝えた。
・子游――春秋時代、呉の人。孔子の弟子。言偃の字。文学に優れ、礼の精神に通じた。

＊

今日の故事成語は、「禹行舜趨」です。

この「禹行舜趨」とは、偉大な聖人の表面的なまねをいくらしたとしても、実質が伴わなければ何の価値もないと説く荀子の教えです。

しかし、わたしはそうは思いません。偉大な聖者の歩き方、走り方、あるいは話し方等をまね、そして偉大な聖者の心に自分自身の心を合わせること、これをもしなすことができるならば、それは大いなる結果が得られるのです。

したがって、この点については、北伝の仏教の内容について理解しているわたしとしては、肯定的にとらえることはできません。ただ、その一部だけを見よう見まねでまね

ることは大した価値がないことは事実です。

したがって、その本質を絶えず記憶修習する、――つまり偉大な聖者の記憶修習をする、偉大な王の記憶修習をする等の記憶修習を行なうことにより、自分自身が変革することは事実ですから、それを認識し、しっかり努力するようにしましょう。



❖ 小人の勇

「荀子、栄辱」 有狗彘之勇者、有賈盗之勇者、有小人之勇者、有士君子之勇者。争飲食、無廉恥、不知是非、不辟死傷、不畏衆彊、恈恈然惟利飲食之見、是狗彘之勇也。為事利、争貨財、無辞譲、果敢而振、猛貪而戻、恈恈然唯利之見、是賈盗之勇也。軽死而暴、是小人之勇也。義之所在、不傾於権、不顧其利、挙国而与之、不為改視、重死持義而不橈、是士君子之勇也。

【書き下し文】

狗彘の勇なる者有り、賈盗の勇なる者有り、小人の勇なる者有り、士君子の勇なる者有り。飲食を争い、廉恥無く、是非を知らず、死傷を辟けず、衆彊を畏れず、恈恈然と

して惟飲食を利することを之れ見るは、是れ狗彘の勇なり。事利を為し、貨財を争い、辞譲無く、果敢にして振い、猛貪にして戻り、恈恈然として唯利を之れ見るは、是れ賈盗の勇なり。死を軽んじて暴なるは、是れ小人の勇なり。義の在る所、権に傾かず、其の利を顧みず、国を挙げて之に与うるも、改め視ることを為さず、死を重んじ義を持して橈まざるは、是れ士君子の勇なり。

【訳】

犬や豚の勇気というものがあり、商人や盗賊の勇気というものがあり、小人の勇気というものがあり、士君子の勇気というものがある。

飲食を奪い合って、恥を知らず、善悪をわきまえず、死傷を避けず、相手の数や強さを恐れず、飽くことなくただ飲食だけを求めるのは、犬や豚の勇気である。

利益のためには財貨を争い、人に譲ることなく、図々しく立ち回り、強欲で人に逆らい、飽くことなくただ利益だけを求めるのは、商人や盗賊の勇気である。

死を軽んじて無謀にふるまうのは、小人の勇気である。

正義にのっとり権力にもなびかず、その利益をも顧みず、国のすべてを与えられても振り向きもせず、死を重んじ正義を堅持して屈しないのは、士君子の勇気である。

＊

今日の故事成語は、「小人の勇」です。

この「小人の勇」とは、荀子が勇気について四つに分けた、その中の一つを表わしています。そして、この「小人の勇」とは、命を軽んじ、無謀な闘争や、あるいは無謀な戦いに対してそれを恐れないことを荀子が戒めた成語であるということができるでしょう。

もともと、勇気というものは、ある現象があり、その現象を達成するための心の働き、強い決意を表わしています。したがって、そこで、例えば対象が結果が出ないような状態で犬死にをする場合、これは本当の勇気ということはいえないのです。

つまり、死というものは、その瞬間、次の輪廻転生を与えるわけですが、しかし、その生における役割というものもそこで放棄してしまうことになるわけです。したがって、堪え忍び、そして目的を淡々と達成する、これこそが本当の勇気であると荀子は説きま

す。

この件については、わたしも全く同意見です。さあ、皆さんも表面的な勇気ではなく、心の奥底に培う強い勇気を持とうではありませんか。



❖蘭芷滫に漸す

［荀子、勧学］ 蘭槐之根、是為芷。其漸之滫、君子不近、庶人不服。其質非不美也、所漸者然也。

【書き下し文】

蘭槐の根、是を芷と為す。其の之を滫に漸さば、君子も近づけず、庶人も服せず。其の質美ならざるに非ざるなり、漸す所の者然るなり。

【訳】

蘭や槐の根は香料となるが、もし尿にひたせば、君子もそばに近づけないし、庶民も身につけようとしない。これは、その本質が良くないというのではなく、ひたしたもの

がそうさせたのである。





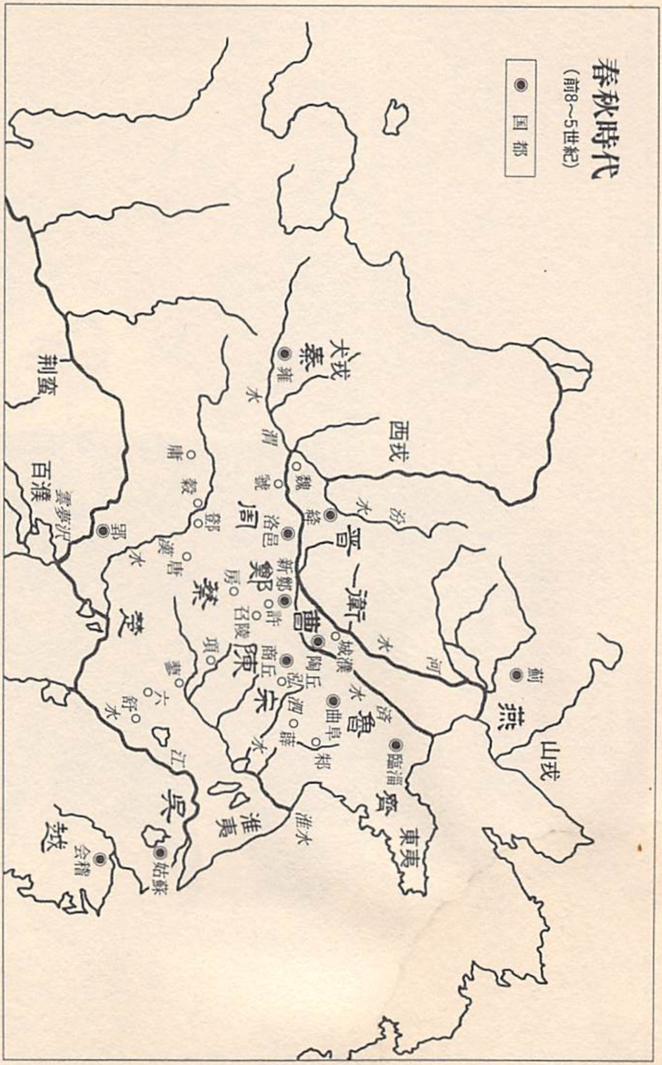
今日の故事成語は、「蘭芷滫に漸す」です。

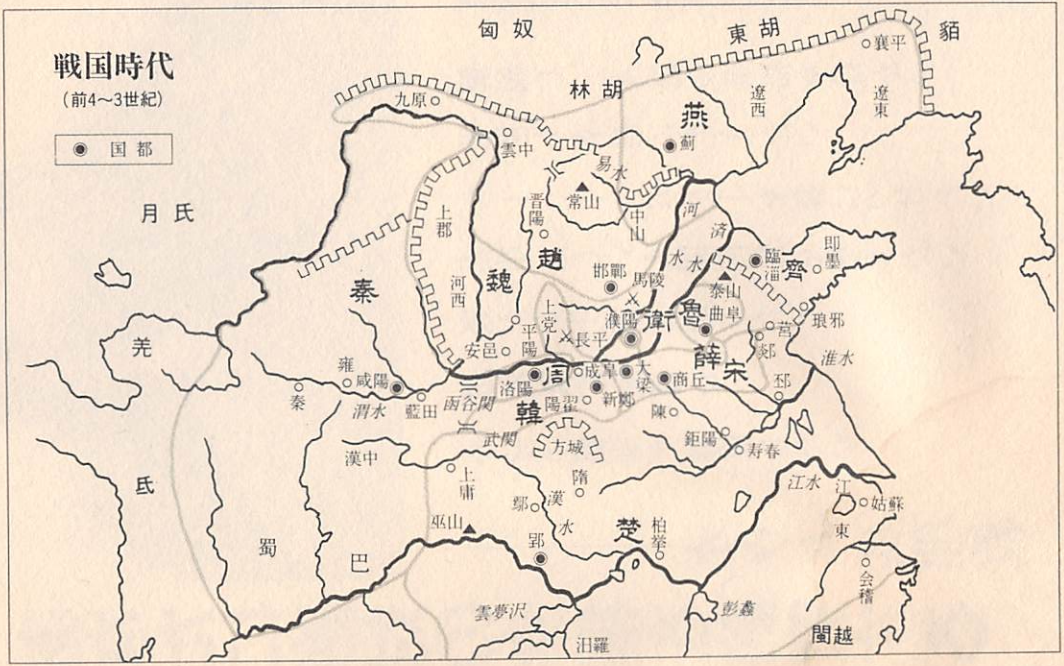
この故事成語は深遠な意味があります。「蘭芷」とは、もし善人あるいは偉大な聖者が現われれば、その法則によって心が解放され、高い世界へ至ることのできる魂を指します。しかし、世の中がけがれ、そして不善が善となり、不徳が徳となるような時代に身を置くと、その魂もその世の中の流れに従ってけがれてしまうのです。

したがって、このけがれた時代に偉大な法則を立ち上げ、そして救済するという救世主は、なかなか大変なカルマをしょわなければならないことになります。

これは、わたしの発願ですが、いかなるけがれた世の中であろうとも、その中で美しく咲きたいものです。また、サキャ神賢も同じように「ドブ川に咲く蓮華であれ」と弟子に説いています。これらの教えの真髄は、明らかに荀子の域を超えたものでしょう。


けがれた時代の偉大な救世主
きみもドブ川に咲く蓮華であれ！


春秋時代
(前8～5世紀)
国都
犬戎
秦
雍
西戎
渭水
汾水
魏
絳
晋
虢
周
洛邑
新鄭
鄭
衛
城濮
曹
河
薊
燕
山戎
済水
臨淄
斉
東夷
魯
曲阜
郯
薛
泗水
宋
商丘
陶丘
弘
陳
項
蔡
厲
許
召陵
唐
鄧
漢水
穀
庸
荊蛮
百濮
雲夢沢
郢
楚
蓼
六
舒水
江
淮夷
淮水
呉
姑蘇
越
会稽


戦国時代
(前4～3世紀)
国都
匈奴
東胡
貊
林胡
月氏
羌
氐
蜀
巴
秦
魏
趙
燕
齊
魯
衛
宋
薛
周
韓
楚
閩越
九原
雲中
襄平
遼西
遼東
薊
易水
常山
中山
晋陽
上郡
河西
邯鄲
馬陵
河
済水
臨淄
即墨
泰山
曲阜
琅邪
莒
郯
上党
長平
濮陽
平陽
安邑
雍
咸陽
秦
渭水
藍田
函谷関
洛陽
成皋
大梁
新鄭
陽翟
商丘
邳
淮水
陳
鉅陽
寿春
方城
武関
漢中
上庸
隋
鄧
漢水
巫山
郢
柏挙
江水
江東
姑蘇
会稽
彭蠡
雲夢沢
汨羅



あなたに絶対の幸福を約束する

――オウム真理教

心身の悩みを解決したい
超健康体を得たい
豊かな生活を送りたい
素晴らしい人間関係を築きたい
スーパー・パワーを身につけたい
来世も幸福に生きたい
解脱し、永遠の至福を得たい

最高の教義、最高の奥儀、そして麻原尊師のもと、すべては確実に実現します。

●オウム真理教が誇る三つの基本的修行体系

1、マハーヤーナ修行体系

現実生活をより豊かにし、幸福な人生をお約束します。ご年輩の方、仕事が忙しく時間のあまり取れない方にお勧めです。

2、タントラ・ヴァジラヤーナ修行体系

行法、イニシエーションを中心として進め、霊性を向上させて、神秘世界を実体験することができます。この修行体系を選択すれば今生で解脱し、悟ることも夢ではありません。

3、テーラヴァーダ修行体系

原始仏教の上座部仏教を再現しました。真理にのっとって清浄な日常生活を送ることによって、幸せな来世が約束されます。また、経典の記憶修習によって心の成熟が促され、悟りを得ることが可能です。オウム真理教の深遠な教義を徹底的に学びたい方に最適です。

※資料請求券を貼付けしたハガキ、または電話にて最寄りの本・支部までご連絡ください。入信案内等、詳しい資料をお送りします。

キリトリ線

もりもり
智慧のわく書 6
資料請求券

ズバリ！真理のメッセージ

リオン・テス・バシレイアス」

中波　1476kHz　毎日22:15～　1:15
短波　英語放送（朝）毎日　5:30～　6:00
　　　　　　　　（昼）毎日　1:30～　2:00

※今週の聴きどころなどを毎日紹介。
　便利なテレホンサービスもぜひご利用を。
　TEL 03(5450)3602

※タイアップマガジン　　定期購読受付中！

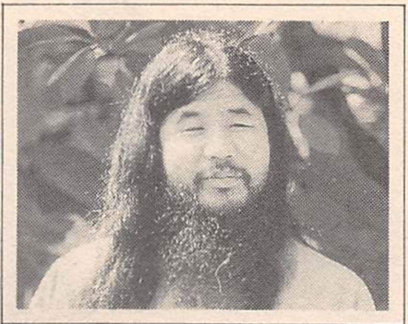
「えんじょい・はぴねす」



※詳しいお問い合わせは、
　「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」係まで。
　TEL 03(5450)6037

モスクワからあなたに――

オウム真理教放送「エウアンゲ



尊師の声が あなたの耳を直撃！

麻原尊師が電波にのってあなたのもとへ。
宗教、音楽、科学、神秘……。
盛りだくさんの内容と、
次から次への新しい発見で
眠気も吹っ飛ぶこの時間！
さあ、あなたも今日から尊師を聴こう！

"オウム真理教ネット"



※ただ今、新入会員の方に素敵なプレゼントをさしあげています。

●なお、その他詳細は下記までお問い合わせください。
〒156 東京都世田谷区赤堤2-42-5
"オウム真理教ネット" 事務局　TEL 03-5300-1805

好評！あなたとオウムをつなぐ

パソコン通信、

オウムについてもっと詳しく知りたい……
教義その他について、いろいろと聞きたいことがある……
オウムの人たちの生の声を聞いてみたい……
そんなあなたに最適な情報ネットワーク

"オウム真理教ネット"のご紹介

TEL番号	03-5300-1800（4回線） Tri-P利用可能（CXAUMNET）
通信速度	1200/2400bps
通信条件	BITS-8 PARITY-NONE STOP-1
プロトコル	X-MODEM Y-MODEM(−G)
ゲストID	GUEST
運用時間	24時間
入会方法	ゲストログイン後、 SYSOPあてメールにて申請

めんどうな手続きはいっさいありません。オウムに興味をお持ちの方、聞いてみたいことがある方は、今すぐお気軽にご利用ください。





麻原彰晃の世界 PART2

麻原彰晃、戦慄の予言

この恐怖の世紀末——君は生き残れるのか!?



驚異的な的中率を誇り、注目を集めてきた麻原彰晃尊師の未来予言。大反響を呼んだPART1に続いて、またもや今回、衝撃の未来予言が続々と明らかにされた。今後の大型経済不況、想像を絶する新兵器が飛び交う人類最終戦争の様相、さらにはそのさ中に登場するキリストの役割や、ユダヤ勢力、世界的秘密結社との戦い等、世紀末の地球の姿が壮大なスケールで浮き彫りとなった。動乱の世紀末を生き残りたい人には必読の一冊!

B6判　定価七七〇円

真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師



大阪支部　06(251)4264
〒541　大阪府大阪市中央区久太郎町3-2-15 マルイビル1F・B1F
堺支部　0722(21)1843
〒590　大阪府堺市海山町4-168-9
和歌山支部　0734(24)2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
広島支部　082(264)7252
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
高知支部　0888(84)8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
福岡支部　092(474)2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
那覇支部　098(866)9537
〒902　沖縄県那覇市安里2-4-12 嘉数グラビアハイツ5F
深谷出張所　0485(74)8143
〒366　埼玉県深谷市萱場441-8
渋谷出張所　03(3476)5065
〒150　東京都渋谷区道玄坂1-15-3　プリメーラ道玄坂317号
若林出張所　03(3418)4147
〒154　東京都世田谷区若林1-1-2
藤和シティコープ若林602号

〈海外支部〉
ニューヨーク支部　212(421)3687
8 East 48th St. #2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228)616647
Auf dem Hügel 48, 53121 Bonn, S.R.Germany
スリランカ支部 (AUM SACCA SAṄGHA ASSOCIATION)
Horahena, Watte, Angulugaha, Galle, Sri Lanka
モスクワ支部　7-095-455-95-32
Kindergarten No.468, 32A Petrozavodskaya ul. Moscow, 125475 Russia

この本をお読みになって、どのような感想をお持ちになりましたか。あなたのご意見を、ぜひ下記の「『もりもり智慧のわく書』読者係」までお送りください。

〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17
オウム出版「『もりもり智慧のわく書』読者係」

◆各道場のご案内◆

富士山総本部 0544(54)1267
〒418-01 静岡県富士宮市人穴381-1
東京総本部 03(5467)2745
〒107 東京都港区南青山7-5-12 マハーポーシャビル2・3F
世田谷道場 03(3327)8565
〒156 東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
杉並道場 03(3396)9393
〒167 東京都杉並区下井草4-4-4 井口ビル2F
札幌支部 011(241)4938
〒060 北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
仙台支部 022(268)3904
〒982 宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
水戸支部 0292(26)8044
〒310 茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
高崎支部 0273(46)1573
〒370-12 群馬県高崎市倉賀野町下稲荷前1081-5
船橋支部 0474(66)4965
〒274 千葉県船橋市新高根6-26-18
横浜支部 045(243)8079
〒231 神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢佐木長者町ビル204
金沢支部 0762(51)8457
〒920 石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
松本支部 0263(28)7429
〒399 長野県松本市芳川野溝527-3
福井支部 0776(26)6145
〒910 福井県福井市御幸3-3-41 東伸ビル2F
名古屋支部 052(252)0709
〒460 愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
京都支部 075(371)3759
〒600 京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F

もりもり智慧のわく書⑥



1993年10月5日・初版発行

定　価———— 550円
著　者———— 真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師
発行者———— 松本知子
　　　　　　 石井久子
発　行———— 株式会社オウム
〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17
TEL 03(3439)6043
振 替 東京2-109325
※乱丁・落丁はお取り替えいたします

ISBN4-87142-078-7 C7098 P550E

もりもり
智慧のわく
書⑥



ISBN4-87142-078-7 C7098 P550E 定価550円(本体534円)